度醫者に見せる樣に勸めた。醫者に診て、貰ふと、發育が充分でないから、室內の溫度を一定の高さにして、晝夜とも變らない位、人工的に暖めなければ不可ないと云つた。宗助の手際では、室內に煖爐を据ゑ付ける設備をする丈でも容易ではなかつた。夫婦はわが時間と算段の許す限りを盡して、專念に赤兒の命を護つた。けれども凡ては徒勞に歸した。一週間の後、二人の血を分けた情の塊は遂に冷たくなつた。お米は幼兒の亡骸を抱いて、

「何うしませう」と啜り泣いた。宗助は再度の打擊を男らしく受けた。冷つたい肉が灰になつて、其灰が又黑い土に和する迄、一口も恐癡らしい言葉は出さなかつた。其內何時となく、二人の間に挾まつてゐた影の樣なものが、次第に遠退いて程なく消えて仕舞つた。

すると三度目の記憶が來た。宗助が東京に移つて始めての年に、お米は又懷妊したのである。出京の當座は、大分身體が衰へてゐたので、お米は勿論、宗助もひどく其處を氣遣つたが、今度こそはといふ腹は兩方にあつたので、張のある月を無事に段々と重ねて行つた。處が丁度五月目になつて、お米は又意外の失敗を遣つた。其頃はまだ水道も引いてなかつたから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかつた。お米はある日裏にゐる下女に云い付ける用が出來たので、井戸流しの傍に置いた盥の傍迄行つて話をした序に、流しを向へ渡らうとして、青い苔の生えてゐる濡れた板の上へ尻持を突いた。お米はまた遣り損なつたとは思つたが、自分の粗忽を面目ながつて、宗助にはわざと何事も語らずに其場を通した。けれども此震動が、何時迄經つても胎兒の發育に是といふ影響も及ぼさず、從つて自分の身體にも少しの異狀を引起さなかつた事が慥に分つた時、お米は漸く安心して、過去の失を改めて宗助の前に告げた。宗助は固より妻を咎める意もなかつた。たゞ、

「能く氣を付けないと危ないよ」と穩かに注意を加へて過ぎた。

兎角するうちに月が滿ちた。愈生れるといふ間際迄日が詰つたとき、宗助は役所へ出ながらも、お米の事が頻りに氣に掛つた。歸りには何時も、今日はことによると留守のうちに抔と案じ續けては、自分の家の格子の前

に立つた。さうして半ば豫期してゐる赤兒の泣聲が聞えないと、却つて何かの變でも起つたらしく感じて、急いで宅へ飛び込んで、自分と自分の粗忽を耻づる事があつた。

幸ひにお米の產氣づいたのは、宗助の外に用のない夜中だつたので、傍にゐて世話の出來ると云ふ點から見れば、甚だ都合が好かつた。產婆も緩くり間に合ふし、脫脂綿其他の準備も悉く不足なく取り揃へてあつた。產も案外輕かつた。けれども肝心の小兒は、たゞ子宮を逃れて廣い處へ出たといふ迄で、浮世の空氣を一口も呼吸しなかつた。產婆は細い硝子の管の樣なものを取つて、小さい口の內へ强い呼息をしきりに吹き込んだが、效目は丸でなかつた。生れたものは肉丈であつた。夫婦は此肉に刻み付けられた、眼と鼻と口とを髣髴した。然し其咽喉から出る聲は遂に聞く事が出來なかつた。

產婆は出產のあつたつい一週間前に來て、丁寧に胎兒の心臟迄聽診して、至極御健全だと保證して行つたのである。よし產婆の云ふ事に間違があつて、腹の兒の發育が今迄のうちに何處かで止つてゐたにした處で、それが直取出されない以上、母體は今日迄平氣に持ち應へる譯がなかつた。其處を段々調べて見て、宗助は自分が未だ嘗て聞いた事のない事實を發見した時に、思はず恐れ驚いた。胎兒は出る間際迄健康であつたのである。けれども臍帶纏絡と云つて、俗に云ふ胞を頸へ捲き付けてゐた。斯う云ふ異常の場合には、固より產婆の腕で切り拔けるより外に仕樣のないもので、經驗のある婆さんなら、取り上げる時に、旨く頸に掛かつた胞を外して引き出す筈であつた。宗助の賴んだ產婆も可成年を取つてゐる丈に、此位のことは心得てゐた。然し胎兒の頸を絡んでゐた臍帶は、時たまある如く一重ではなかつた。二重に細い咽喉を卷いてゐる胞を、あの細い所を通す時に外し損なつたので、小兒はぐつと氣管を絞められて窒息して仕舞つたのである。

罪は產婆にもあつた。けれども半以上はお米の落度に違なかつた。臍帶纏絡の變狀は、お米が井戸端で滑つて痛く尻持を突いた五箇月前既に自ら

醸したものと知れた。お米は産後の蓐中に其始末を聞いて、たゞ輕く首肯いたぎり何にも云はなかつた。さうして、疲勞に少し落ち込んだ眼を霑ませて、長い睫毛をしきりに動かした。宗助は慰めながら手帛で頰に流れる涙を拭いて遣つた。

是が子供に關する夫婦の過去であつた。此苦い經驗を嘗めた彼等は、それ以後幼兒に就て餘り多くを語るを好まなかつた。けれども二人の生活の裏側は、此記憶のために淋しく染め付けられて、容易に剝げさうには見えなかつた。時としては、彼我の笑聲を通してさへ、お互の胸に、此裏側が薄暗く映る事もあつた。斯ういふ譯だから、過去の歴史を今夫に向つて新たに繰返さうとは、お米も思ひ寄らなかつたのである。宗助も、今更妻からそれを聞かせられる必要は、少しも認めてゐなかつたのである。

お米の夫に打ち明けると云つたのは、固より二人の共有してゐた事實に就てゞはなかつた。彼女は三度目の胎兒を失つた時、夫から其折の模樣を聞いて、如何にも自分が殘酷な母であるかの如く感じた。自分が手を下した覺がないにせよ、考へ樣によつては、自分と生を與へたものゝ生を奪ふために、暗闇と明海の途中に待受けて、これを絞殺したと同じ事であつたからである。斯う解釋した時、お米は恐ろしい罪を犯した惡人と己を見做さない譯に行かなかつた。さうして思はざる德義上の責を人知れず受けた。しかも其責を分つて、共に苦しんで呉れるものは世界中に一人もなかつた。お米は夫にさへ此苦しみを語らなかつたのである。

彼女は其時普通の産婦の樣に、三週間を床の中で暮した。それは身體から云ふと極めて安靜の三週間に違ひなかつた。同時に心から云ふと、恐るべき忍耐の三週間であつた。宗助は亡兒のために、小さい柩を拵へて、人の眼に立たない葬儀を營んだ。しかる後、又死んだものゝために小さな位牌を作つた。位牌には黑い漆で戒名が書いてあつた。位牌の主は戒名を持つてゐた。けれども俗名は兩親といへども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の簞笥の上に載せて、役所から歸ると絶えず線香を焚いた。其香が六疊に寢てゐるお米の鼻に時々通つた。彼女の官能は當時それ程に鋭く

なつてゐたのである。しばらくしてから宗助は何を考へたか、小さい位牌を箪笥の抽出の底へ仕舞つてしまつた。其所には福岡で亡くなつた子供の位牌と、東京で死んだ父の位牌が、別々に綿で包んで叮嚀に入てあつた。東京の家を畳むとき、宗助は先祖の位牌を一つ殘らず携へて、諸所を漂泊するの煩はしさに堪へなかつたので、新しい父の分丈を鞄の中へ收めて、其他は悉く寺へ預けて置いたのである。

お米は宗助のする凡てを、寢ながら見たり聞いたりしてゐた。而して蒲團の上に仰向けになつた儘、此二つの少さい位牌を、眼に見えない因果の糸を長く引いて互に結び付けた。其から其糸を猶遠く延ばして、是は位牌にもならずに流れて仕舞つた、始めから形のない、ぼんやりした影の樣な死兒の上に投げかけた。お米は廣島と福岡と東京に殘る一つ宛の記憶の底に、動かしがたい運命の嚴かな支配を認めて、其嚴かな支配の下に立つ、幾月日の自分を、不思議にも同じ不幸を繰返すべく作られた母であると覺じた時、時ならぬ呪詛の聲を耳の傍に聞いた。彼女が三週間の安靜を、蒲團の上に貪らなければならないやうに、生理的に强ひられてゐる間、彼女の皷膜は此呪詛の聲で殆ど絶えず鳴つてゐた。三週間の安臥は、お米に取つて實に比類のない忍耐の三週間であつた。

お米は此苦しい半月餘りを、枕の上で凝と見詰めながら過ごした。仕舞には我慢して横になつてゐるのが、如何にも苛かつたので、看護婦の歸つた明くる日に、こつそり起きてぶらぶして見たが、それでも心に逼る不安は、容易に紛らせなかつた。退儀な身體を無理に動かす割に、頭の中は少しも動いて呉れないので、又落膽りして、ついには取り放しの夜具の下へ潜り込んで、人の世を遠ざける樣に、眼を堅く閉つて仕舞ふ事もあつた。

其内定期の三週間も過ぎて、お米の身體は自からすつきりなつた。お米は綺麗に床を拂つて、新しい氣のする眉を再び鏡に照した。それは更衣の時節であつた。お米も久し振に綿の入つた重いものを脱ぎ棄てゝ、肌に垢の觸れない輕い氣持を爽やかに感じた。春と夏の境をぱつと飾る陽氣な日本の風物は、淋しいお米の頭にも幾分かの反響を與へた。けれども、夫は

たゞ沈んだものを掻き立てゝ、賑やかな光りのうちに浮かした迄であつた。

お米の暗い過去の中に、其時一種の好奇心が萌したのである。

天氣の勝れて美くしいある日の午前、お米は何時もの通り宗助を送り出してから直に、表へ出た。もう女は日傘を差して外を行くべき時節であつた。急いで日向を歩くと額の辺が少し汗ばんだ。お米は歩き〳〵、着物を着換へる時、箪笥を開けたら、思はず二番目の抽出の底に仕舞つてあつた、新しい位牌に手が觸れた事を思ひつゞけて、とう〳〵ある易者の門を潜つた。

彼の女は多數の文明人に共通な迷信を子供の時から持つてゐた。けれども平生は其迷信が又多數の文明人と同じ樣に、遊戯的に外に現れる丈で濟んでゐた。それが實生活の嚴かな部分を冒す樣になつたのは、全く珍らしいと云はなければならなかつた。お米は其時眞面目な態度と眞面目な心を有つて、易者の前に坐つて、自分が將來子を生むべき、又子を育てるべき運命を天から與へられるだらうかを確めた。易者は大道に店を出して、往來の人の身の上を一二錢で占なふ人と、少しも違つた樣子もなく、算木を色々に並べて見たり、筮竹を採んだり數へたりした後で、仔細らしく腮の下の髯を握つて何か考へたが、終にお米の顔をつく〳〵眺めた末、

「貴方には子供は出來ません」と落ち付き拂つて宣告した。お米は無言の儘、しばらく易者の言葉を頭の中で嚙んだり碎いたりした。それから顔を上げて、

「何故でせう」と聞き返した。其時お米は易者が返事をする前に、又考へるだらうと思つた。所が彼はまともにお米の眼の間を見詰めたまゝ、すぐ

「貴方は人に對して濟まない事をした覺がある。其罪が祟つてゐるから、子供は決して育たない」と云ひ切つた。お米は此一言に心臟を射拔かれる思ひがあつた。くしやりと首を折つたなり家へ歸つて、其夜は夫の顔さへ碌々見上げなかつた。

お米の宗助に打ち明けないで、今迄過したといふのは、此易者の判斷であつた。宗助は床の間に乘せた細い洋燈の灯が、夜の中に沈んで行きさう

な静かな晩に、始めてお米の口から其話を聞いたとき、流石に好い氣味はしなかつた。

「神經の起つた時、わざ〳〵そんな馬鹿な所へ出掛けるからさ。錢を出して下らない事を云はれて、詰らないぢやないか。其後もその占の宅へ行くのかい」

「恐ろしいから、もう決して行かないわ」

「行かないが可い。馬鹿氣てゐる」

宗助はわざと應揚な答をして又寢て仕舞つた。

十四

宗助とお米とは仲の好い夫婦に違なかつた。一所になつてから今日迄六年程の長い月日を、まだ半日も氣貧く暮した事はなかつた。言逆に顏を赤らめ合つた試は猶なかつた。二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれども其他には一般の社會に待つ所の極めて少い人間であつた。彼等は、日常の必要品を供給する以上の意味に於て、社會の存在を殆ど認めてゐなかつた。彼等に取つて絶對に必要なものはお互丈で、其お互丈が、彼等にはまた充分であつた。彼等は山の中にゐる心を抱いて、都會に住んでゐた。

自然の勢ひとして、彼等の生活は單調に流れない譯に行かなかつた。彼等は複雜な社會の煩ひを避け得たと共に、其社會の活動から出る樣々の經驗に直接觸れる機會を、自分と寒いで仕舞つて、都會に住みながら、都會に住む文明人の特權を棄てた樣な結果に到着した。彼等も自分達の日常に變化のない事は折々自覺した。お互がお互に飽きるの、物足りなくなるのといふ心は微塵も起らなかつたけれども、お互の頭に受け入れる生活の內容には、刺戟に乏しい或物が潜んでゐる樣な鈍い訴へがあつた。それにも拘はらず、彼等が毎日同じ判を同じ胸に押して、長の月日を倦まず渡つて來たのは、彼等が始から一般の社會に興味を失つてゐたためではなかつた。社會の方で彼等を二人限に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた結果に

外ならなかつた。外に向つて生長する餘地を見出し得なかつた二人は、内に向つて深く延び始めたのである。彼等の生活は廣さを失なふと同時に、深さを增して來た。彼等は六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歲月を擧げて、互の胸を掘り出した。彼等の命は、いつの間にか互の底に迄喰ひ入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云へば、道義上切り離す事の出來ない一つの有機體になつた。二人の精神を組み立てる神經系は、最後の纖維に至る迄、互に抱き合つて出來上つてゐた。彼等は大きな水盤の表に滴たつた二點の油の樣なものであつた。水を彈いて二つが一所に集まつたと云ふよりも、水に彈かれた勢ひで、丸く寄り添つた結果、離れる事が出來なくなつたと評する方が適當であつた。

彼等は此抱合の中に、尋常の夫婦に見出し難い親和と飽滿と、それに伴ふ倦怠とを兼具へてゐた。而して其倦怠の慵い氣分に支配されながら、自己を幸福と評價する事丈は忘れなかつた。倦怠は彼等の意識に眠の樣な靄を掛けて、二人の愛をうつとり霞ます事はあつた。けれども簾で神經を洗はれる不安は、決して起し得なかつた。要するに彼等は世間に疎い丈それ丈仲の好い夫婦であつたのである。

彼等は人並以上に睦ましい月日を渝らずに今日から明日へと繫いで行きながら、常は其處に氣が付かずに顏を見合せてゐる樣なもの、時々自分達の睦ましがる心を、自分で確と認める事があつた。その場合には必ず今迄睦まじく過ごした長の歲月を溯つて、自分達が如何な犧牲を拂つて、結婚を敢てしたかと云ふ當時を懷ひ出さない譯には行かなかつた。彼等は自然が彼等の前に齎らした恐るべき復讐の下に、戰きながら跪づいた。同時に此復讐を受けたるために得た互の幸福に對して、愛の神に一瓣の香を焚く事を忘れなかつた。彼等は鞭たれつゝ死に赴くものであつた。たゞ其鞭の先に、凡てを癒やす甘い蜜の着いてゐる事を覺つたのである。

宗助は相當に資產のある東京ものゝ子弟として、彼等に共通な派出な嗜好を、學生時代に遠慮なく充した男である。彼は其時服裝にも、動作にも、

思想にも、悉く當世らしい才人の面影を漲らして、昂い首を世間に擡げつつ、行かうと思ふ邊りを濶歩した。彼の襟の白かつた如く、彼の洋袴の裾が綺麗に折返されてゐた如く、其下から見える彼の靴足袋が模様入のカシミヤであつた如く、彼の頭は華奢な世間向であつた。

彼は生れ付理解の好い男であつた。從つて大した勉強をする氣にはなれなかつた。學問は社會へ出るための方便と心得てゐたから、社會を一歩退かなくつては達する事の出來ない、學者といふ地位には、餘り多くの興味を有つてゐなかつた。彼はたゞ教場へ出て、普通の學生のする通り、多くのノートブックを黒くした。けれども宅へ歸つて來て、それを讀み直したり、手を入れたりした事は滅多になかつた。休んで拔けた所さへ大抵は其儘にして放つて置いた。彼は下宿の机の上に、此ノートブックを綺麗に積み上げて、何時見ても整然と秩序の付いた書齋を空にしては、外を出歩いた。友達は多く彼の寛濶を羨んだ。宗助も得意であつた。彼の未來は虹の様に美しく彼の眸を照した。

其頃の宗助は今と違つて多くの友達を持つてゐた。實を云ふと、輕快な彼の眼に映ずる凡ての人は、殆んど誰彼の區別なく友達であつた。彼は敵といふ言葉の意味を正當に解し得ない樂天家として、若い世をのびゝと渡つた。

「なに不景氣な顔さへしなければ、何處へ行つたつて歓迎されるもんだよ」と學友の安井によく話した事があつた。實際彼の顔は、他を不愉快にする程深刻な表情を示し得た試がなかつた。

「君は身體が丈夫だから結構だ」とよく何處かに故障の起る安井が羨ましがつた。此安井といふのは國は越前だが、長く横濱に居たので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる點がなかつた。着物道樂で、髪の毛を長くして眞中から分ける癖があつた。高等學校は違つてゐたけれども、講義のときよく隣合せに並んで、時々聞き損なつた所抔を後から質問するので、口を利き出したのが元になつて、つい懇意になつた。それが學年の始まりだつたので、京都へ來て日のまだ淺い宗助には大分の便宜であつた。彼は安井

の案内で新しい土地の印象を酒の如く吸ひ込んだ。二人は毎晩の樣に三條とか四條とかいふ賑やかな町を歩いた。時によると京極も通り抜けた。橋の直中に立つて鴨川の水を眺めた。東山の上に出る靜かな月を見た。さうして京都の月は東京の月よりも丸くて大きい樣に感じた。町や人に厭きたときは、土曜と日曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の大竹藪に綠の籠る深い姿を喜んだ。松の幹の染めた樣は赤いのが、日を照返して幾本となく並ぶ風情を樂んだ。ある時は大悲閣へ登つて、卽非の額の下に仰向きながら、谷底の流れを下る櫓の音を聞いた。其音が鴈の鳴聲によく似てゐるのを二人とも面白がつた。ある時は、平八茶屋迄出掛けて行つて、そこに一日寐てゐた。さうして不味い河魚の串に刺したのを、かみさんに燒かして酒を飲んだ。其かみさんは手拭を被つて、紺の立付見た樣なものを穿いてゐた。

宗助は斯んな新しい刺戟の下に、しばらくは慾求の滿足を得た。けれども一通り古い都の臭を嗅いで歩くうちに、凡てがやがて、平板に見えだして來た。其時彼は美しい山の色と清い水の色が、最初程鮮明な影を自分の頭に宿さないのを物足らず思ひ始めた。彼は暖かな若い血を抱いて、其熱りを冷す深い綠に逢へなくなつた。さうといつて、此情熱を焚き盡す程の烈しい活動には無論出會はなかつた。彼の血は高い脈を打つて、徒らにむづ痒く彼の身體の中を流れた。彼は腕組をして、坐ながら四方の山を眺めた。さうして、

「もう斯んな古臭い所には厭きた」と云つた。

安井は笑ひながら、比較のため、自分の知つてゐる或友達の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは淨瑠璃に聞の土山雨が降るとある有名な宿の事であつた。朝起きてから夜寐る迄、眼に入るものは山より外にない所で、丸で摺鉢の底に住んでゐると同じ有樣だと告げた上、安井は其友達の小さい時分の經驗として、五月雨の降りつゞく折抔は、子供心に、今にも自分の住んでゐる宿が、四方の山から流れて來る雨の中に浸つて仕舞ひさうで、心配でならなかつたと云ふ話をした。宗助はそんな摺鉢の底で一生

を過す人の運命程、情ないものはあるまいと考へた。

「さう云ふ所に、人間がよく生きてゐられるな」と不思議さうな顔をして安井に云つた。安井も笑つてゐた。さうして土山から出た人物の中では、千兩函を靡替へて磔になつたのが一番大きいのだと云ふ一口話を、矢張り友達から聞いた通り繰返した。狹い京都に飽きた宗助は、單調な生活を破る色彩として、さう云ふ出來事も百年に一度位は必要だらうと迄思つた。

其時分の宗助の眼は、常に新しい世界にばかり注がれてゐた。だから自然が一通り四季の色を見せて仕舞つた跡では、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉を迎へる必要がなくなつた。强く烈しい命に生きたと云ふ證券を飽迄握りたかつた彼には、活きた現在と、是から生れやうとする未來が、當面の問題であつたけれども、消えかゝる過去は、夢同樣に價の乏しい幻影に過ぎなかつた。彼は多くの剝げかゝつた社と、寂果てた寺を見盡して、色の褪めた歷史の上に、黑い頭を振り向ける勇氣を失ひかけた。寐惚けた昔に低徊する程、彼の氣分は枯れてゐなかつたのである。

學年の終りに宗助と安井とは再會を約して手を分つた。安井は一先鄕里の福井へ歸つて、夫から橫濱へ行く積りだから、若其時には手紙を出して通知をしやう、さうして成るべくなら一所の汽車で京都へ下らう、もし時間が許すなら、興津あたりで泊つて、淸見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩くり遊んで行かうと云つた。宗助は大いに可からうと答へて、腹のなかでは既に安井の端書を手にする時の心持さへ豫想した。

宗助が東京へ歸つたときは、父は固よりまだ丈夫であつた。小六は子供であつた。彼は一年ぶりに殷んな都の炎熱と煤烟を呼吸するのを却て嬉しく感じた。燦く樣な日の下に、渦を捲いて狂ひ出しさうな瓦の色が、幾里となく續く景色を、高い所から眺めて、是でこそ東京だと思ふ事さへあつた。今の宗助なら目を眩しかねない事々物々が、悉く壯快の二字を彼の額に燒き付けべく、其時は反射して來たのである。

彼の未來は封じられた蕾のやうに、開かない先は他に知れないばかりでなく、自分にも確とは分らなかつた。宗助はたゞ洋々の二字が彼の前途に

棚引いてゐる氣がした丈であつた。彼は此暑い休暇中にも、卒業後の自分に對する謀を忽かせにはしなかつた。彼は大學を出てから、官途に就かうか、又は實業に從はうか、それすらまだ判然と心に極めてゐなかつたに拘はらず、何方の方面でも構はず、今のうちから進める丈進んで置く方が利益だと心付いた。彼は直接父の紹介を得た。父を通して間接に其知人の紹介を得た。さうして自分の將來を影響し得る樣な人を物色して、二三の訪問を試みた。彼等のあるものは、避暑といふ名義の下に、既に東京を離れてゐた。あるものは不在であつた。又あるものは多忙のため時を期して、勤務先で會はうと云つた。宗助は日のまだ高くならない七時頃に、昇降器で煉瓦造の三階へ案内されて、其處の應接間に、もう七八人も自分と同じ樣に、同じ人を待つてゐる光景を見て驚いた事もあつた。彼は斯うして新らしい所へ行つて、新らしい物に接するのが、用向の成否に關はらず、今迄眼に付かずに過ぎた活きた世界の斷片を、頭へ詰め込む樣な氣がして何となく愉快であつた。

父の云ひ付で、毎年の通り蟲干の手傳をさせられるのも、斯んな時には、却つて興味の多い仕事の一部分に數へられた。彼は冷たい風の吹き通す土藏の戸前の濕つぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあつた江戸名所圖會と、江戸砂子といふ本を物珍しさうに眺めた。壁迄熱くなつた座敷の眞中へ胡坐を掻いて、下女の買つて來た樟腦を、小さな紙片に取り分けては、醫者で呉れる散藥の樣な形に疊んだ。宗助は子供の時から、此樟腦の高い香と、汗の出る土用と、砲烙灸と、蒼空を絞く舞ふ鳶とを連想してゐた。

兎角するうちに節は立秋に入つた。二百十日の前には、風が吹いて雨が降つた。空には薄墨の裏染んだ樣な雲がしきりに動いた。寒暖計が二三日下がり切りに下がつた。宗助はまた行李を麻繩で絡げて、京都へ向ふ支度をしなければならなくなつた。

彼は此間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家へ歸つた當座は、まだ二月も先の事だからと緩くり構へてゐたが、段々時日が逼るに從つて、安井の消息が氣になつてきた。安井は其後一枚の端書さへ寄こさなかつた

のである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事は遂に來なかつた。宗助は横濱の方へ問合はせて見やうと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、何うする事も出來なかつた。

立つ前の晩に、父は宗助を呼んで、宗助の請求通、普通の旅費以外に、途中で二三日滯在した上、京都へ着いてからの當分の小遣ひを渡して、

「成る丈節儉しなくちや不可ない」と諭した。

宗助はそれを、普通の子が普通の親の訓戒を聞く時の如くに聞いた。父は又、

「來年また歸つて來る迄は會はないから、隨分氣を付けて」と云つた。其歸つて來る時節には、宗助はもう歸れなくなつてゐたのである。さうして歸つて來た時は、父の亡骸がもう冷たくなつてゐたのである。宗助は今に到る迄、其時の父の面影を思ひ浮かべては濟まない樣な氣がした。

愈立つと云ふ間際に、宗助は安井から一通の封書を受取つた。開いて見ると、約束通り一所に歸る積でゐたが、少し事情があつて先へ立たなければならない事になつたからと云ふ斷りを述べた末に、何れ京都で緩くり會はうと書いてあつた。宗助はそれを洋服の内懐に押し込んで汽車に乘つた。約束の興津へ來たとき彼は一人でプラットフォームへ降りて、細長い一筋町を清見寺の方へ歩いた。夏も既に過ぎた九月の初なので、大方の避暑客は早く引き上げた後だから、宿屋は比較的閑靜であつた。宗助は海の見える一室の中に腹這になつて、安井へ送る繪端書へ二三行の文句を書いた。其内に、君が來ないから僕一人で此處へ來たといふ言葉を入れた。

翌日も約束通り一人で三保と龍華寺を見物して、京都へ行つてから安井に話す材料を出來る丈拵へた。然し天氣の所爲か、當にした連のないためか、海を見ても山へ登つても、夫程面白くなかつた。宿に凝としてゐるのは、猶退屈であつた。宗助は忽々に又宿の浴衣を脱ぎ棄てゝ、絞りの三尺と共に欄干に掛けて、興津を去つた。

京都へ著いた一日目は、夜汽車の疲れやら、荷物の整理やらで、往來の日影を知らずに暮らした。二日目になつて漸く學校へ出て見ると、教師は

まだ出揃つてゐなかつた。學生も平日よりは數が不足であつた。不審な事には、自分より三四日前に歸つてゐるべき筈の安井の顏さへ何處にも見えなかつた。宗助はそれが氣にかゝるので、歸りにわざ〳〵安井の下宿へ廻つて見た。安井の居る處は樹と水の多い加茂の社の傍であつた。彼は夏休み前から、少し閑靜な町外れへ移つて勉强する積だとか云つて、わざ〳〵此不便な村同樣な田舍へ引込んだのである。彼の見付出した家からが寂た土塀を二方に圍らして、旣に古風に片付いてゐた。宗助は安井から、其處の主人はもと加茂神社の神官の一人であつたと云ふ話を聞いた。非常に能辯な京都言葉を操る四十許の細君がゐて、安井の世話をしてゐた。

「世話つて、たゞ不味い菜を拵へて、三度づゝ室へ運んで呉れる丈だよ」

と安井は移り立てから此細君の惡口を利いてゐた。宗助は安井を此處に二三度訪ねた緣故で、彼の所謂不味い菜を拵へる主を知つてゐた。細君の方でも宗助の顏を覺えてゐた。細君は宗助を見るや否や、例の柔かい舌で慇懃な挨拶を述べた後、此方から聞かうと思つて來た安井の消息を却て向ふから尋ねた。細君の云ふ處によると、彼は鄕里へ歸つてから、當日に至る迄、一片の音信さへ下宿へは出さなかつたのである。宗助は案外な思ひで自分の下宿へ歸つて來た。

夫から一週間程は、學校へ出るたんびに、今日は安井の顏が見えるか、明日は安井の聲がするかと、毎日漠然とした豫期を抱いては敎室の戸を開けた。さうして毎日又漠然とした不足を感じては歸つて來た。尤も最後の三四日に於ける宗助は、早く宗井に會ひたいと思ふよりも、少し事情があるから失敬して先へ立つとわざ〳〵通知しながら、何時迄待つても影も見せない彼の安否を、關係者として寧ろ氣に掛けてゐたのである。彼は學友の誰彼に萬遍なく安井の動靜を聞いて見た。然し誰も知るものはなかつた。たゞ一人が、昨夕四條の入込の中で、安井によく似た浴衣がけの男を見たと答へた事があつた。然し宗助にはそれが安井だらうとは信じられなかつた。處が其話を聞いた翌日、卽ち宗助が京都へ着いてから約一週間の後、話の通りの服裝をした安井が、突然宗助の處へ尋ねて來た。

宗助は着流しの儘麥藁帽を手に持つた友達の姿を久し振に眺めた時、夏休み前の彼の顏の上に、新しい何物かゞ更に付け加へられた樣な氣がした。安井は黑い髮に油を塗つて、目立つ程綺麗に頭を分けてゐた。さうして今床屋へ行つて來た所だと言譯らしい事を云つた。

其晩彼は宗助と一時間餘りも雜談に耽つた。彼の重々しい口の利き方、自分を憚つて、思ひ切れない樣な話の調子、「然るに」と云ふ口癖、凡て平生の彼と異なる點はなかつた。たゞ彼は何故宗助より先へ横濱を立つたかを語らなかつた。又途中何處で暇取つた爲、宗助より後れて京都へ着いたかを判然告げなかつた。然し彼は三四日前漸く京都へ着いた事丈を明かにした。さうして、夏休み前にゐた下宿へはまだ歸らずにゐると云つた。

「夫で何處に」と宗助が聞いたとき、彼は自分の今泊つてゐる宿屋の名前を、宗助に敎へた。それは三條邊の三流位の家であつた。宗助は其名前を知つてゐた。

「何うして、其樣な所へ這入つたのだ。當分其處にゐる積なのかい」と宗助は重ねて聞いた。安井はたゞ少し都合があつてと許答へたが、

「下宿生活はもう已めて、小さい家でも借りやうかと思つてゐる」と思ひがけない計畫を打ち明けて、宗助を驚かした。

それから一週間ばかりの中に、安井はとう〳〵宗助に話した通り、學校近くの閑靜な所に一戸を構へた。それは京都に共通な暗い陰氣な作りの上に、柱や格子を黑赤く塗つて、わざと古臭く見せた狹い貸家であつた。門口に誰の所有とも付かない柳が一本あつて、長い枝が殆ど軒に觸りさうに風に吹かれる樣を宗助は見た。庭も東京と違つて、少しは整つてゐた。石の自由になる所だけに、比較的大きなのが座敷の眞正面に据ゑてあつた。其下には涼しさうな苔がいくらでも生えた。裏には敷居の腐つた物置が空の儘からんと立つてゐる後に、隣の竹藪が便所の出入りに望まれた。

宗助の此處を訪問したのは、十月に少し間のある學期の始めであつた。殘暑がまだ强いので宗助は學校の往復に、蝙蝠傘を用ひてゐた事を今に記憶してゐた。彼は格子の前で傘を疊んで、內を覗き込んだ時、粗い縞の浴

衣を着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土で、それが眞直に裏迄突き抜けてゐるのだから、這入つてすぐ右手の玄關めいた上り口を上らない以上は、暗いながら一筋に奥の方迄見える譯であつた。宗助は浴衣の後影が、裏口へ出る所で消えてなくなる迄其處に立つてゐた。それから格子を開けた。玄關へは安井自身が現れた。

座敷へ通つてしばらく話してゐたが、さつきの女は全く顔を出さなかつた。聲も立てず、音もさせなかつた。廣い家でないから、つい隣の部屋位にゐたのだらうけれども、居ないのと丸で違はなかつた。この影の樣に靜かな女がお米であつた。

安井は鄕里の事、東京の事、學校の講義の事、何くれとなく話したけれども、お米の事に就ては一言も口にしなかつた。宗助も聞く勇氣に乏しかつた。其日はそれなり別れた。

次の日二人が顔を合したとき、宗助は矢張女の事を胸の中に記憶してゐたが、口へ出しては一言も語らなかつた。安井も何氣ない風をしてゐた。

懇意な若い青年が心易立に話し合ふ遠慮のない題目は、是迄二人の間に何度となく交換されたにも拘はらず、安井はこゝへ來て、息詰つた如くに見えた。宗助も其處を無理にこぢ開ける程の強い好奇心は有たなかつた。從つて女は二人の意識の間に挾まりながら、つい話頭に上らないで、又一週間ばかり過ぎた。

其日曜に彼は又安井を訪ふた。それは二人の關係してゐる或會に就て用事が起つたためで、女とは全く緣故のない動機から出た淡泊な訪問であつた。けれども座敷へ上がつて、同じ處へ坐らせられて、垣根に沿ふた小さな梅の木を見ると、此前來た時の事が明かに思ひ出された。其日も座敷の外は、しんとして靜であつた。宗助は其靜かなうちに忍んでゐる若い女の影を想像しない譯に行かなかつた。同時にその若い女は此前と同じ樣に、決して自分の前に出て來る氣遣はあるまいと信じてゐた。

此豫期の下に、宗助は突然お米に紹介されたのである。其時お米は此間の樣に粗い浴衣を着てはゐなかつた。是から餘所へ行くか、又は今外から

歸つて來たと云ふ風な粧ひをして、次の間から出て來た。宗助にはそれが意外であつた。然し大した綺羅を着飾つた譯でもないので、衣服の色も、帶の光も、夫程彼を驚かす迄には至らなかつた。其上お米は若い女に有勝の嬌羞といふものを、初對面の宗助に向つて、あまり多く表はさなかつた。たゞ普通の人間を靜にして言葉寡なに切り詰めた丈に見えた。人の前へ出ても、隣の室に忍んでゐる時と、あまり區別のない程落付いた女だといふ事を見出した宗助は、それから推して、お米のひつそりしてゐたのは、穴勝恥かしがつて、人の前へ出るのを避けるため許でもなかつたんだと思つた。

安井はお米を紹介する時、

「是は僕の妹だ」といふ言葉を用ひた。宗助は四五分對坐して、少し談話を取り換はしてゐるうちに、お米の口調の何處にも、國訛らしい音の交つてゐない事に氣が付いた。

「今迄御國の方に」と聞いたら、お米が返事をする前に安井が、

「いや横濱に長く」と答へた。

其日は二人して町へ買物に出やうと云ふので、お米は不斷着を脱ぎ更へて、暑い所をわざ〳〵新らしい白足袋迄穿いたものと知れた。宗助は折角の出懸を喰ひ留めて、邪魔でもした樣に氣の毒な思ひをした。

「なに宅を持ち立てだものだから、毎日〳〵要るものを新しく發見するんで、一週に一二返は是非都迄買ひ出しに行かなければならない」と云ひながら安井は笑つた。

「途迄一所に出掛けやう」と宗助はすぐ立ち上がつた。序に家の樣子を見てくれと安井の云ふに任せた。宗助は次の間にある亞鉛の落しの付た四角な火鉢や、黄な安つぽい色をした眞鍮の藥罐や、古びた流しの傍に置かれた新し過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。安井は門口へ錠を卸して、鍵を裏の家へ預けるとか云つて、駈けて行つた。宗助とお米は待つてゐる間に、二言三言、尋常な口を利いた。

宗助は此三四分間に取り換はした互の言葉を、いまだに覺えてゐた。そ

れは只の男が只の女に對して人間たる親しみを表はすために、遣り取りする簡略な言葉に過ぎなかつた。形容すれば水の樣に淺く淡いものであつた。彼は今日迄路傍道上に於て、何かの折に觸れて、知らない人を相手に、是程の挨拶をどの位繰り返して來たか分らなかつた。

宗助は極めて短い其時の談話を、一々思ひ浮べるたびに、其一々が、殆んど無着色と云つていゝ程に、平淡であつた事を認めた。さうして、斯く透明な聲が、二人の未來を、何うしてあゝ眞赤に塗り付けたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を經て昔の鮮かさを失つてゐた。互を焚き焦した焔は、自然と變色して黑くなつてゐた。二人の生活は斯樣にして暗い中に沈んでゐた。宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、此淡泊な挨拶が、如何に自分等の歷史を濃く彩つたかを、胸の中で飽迄味はひつゝ、平凡な出來事を重大に變化させる運命の力を恐ろしがつた。

宗助は二人で門の前に佇んでゐる時、彼等の影が折れ曲つて、半分許土塀に映つたのを記憶してゐた。お米の影が蝙蝠傘で遮られて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶してゐた。少し傾きかけた初秋の日が、じり〳〵二人を照り付けたのを記憶してゐた。お米は傘を差した儘、それ程涼しくもない柳の下に寄つた。宗助は白い筋を緣に取つた紫の傘の色と、まだ褪め切らない柳の葉の色を、一歩遠退いて眺め合はした事を記憶してゐた。

今考へると凡てが明かであつた。從つて何等の奇もなかつた。二人は土塀の影から再び現れた安井を待ち合はして、町の方へ歩いた。歩く時、男同志は肩を並べた。お米は草履を引いて後に落ちた。話も多くは男丈で受持つた。それも長くはなかつた。途中迄來て宗助は一人分れて、自分の家に歸つたからである。

けれども彼の頭には其日の印象が長く殘つてゐた。家へ歸つて湯に入つて、燈火の前に坐つた後にも、折々色の着いた平たい畫として、安井とお米の姿が眼先にちらついた。それのみか床に入つてからは、妹だと云つて紹介されたお米が、果して本當の妹であらうかと考へ始めた。安井に問ひ

詰めない限り、此疑ひの解決は容易でなかつたけれども、臆斷はすぐ付いた。宗助は此臆斷を許すべき餘地が、安井とお米の間に充分存在し得るだらう位に考へて、寐ながら可笑しく思つた。しかも其臆斷に、腹の中で徂徊する事の馬鹿〳〵しいのに氣が付いて、消し忘れた洋燈を漸くふつと吹き消した。

斯う云ふ記憶の、次第に沈んで痕迹もなくなる迄、御互の顏を見ずに過ごす程、宗助と安井とは疎遠ではなかつた。二人は毎日學校で出合ふ許りでなく、依然として夏休み前の通り往來を續けてゐた。けれども宗助が行くたびに、お米は必ず挨拶に出るとは限らなかつた。三遍に一遍位は顏を見せないで、始めての時の樣に、ひつそり隣の室に忍んでゐる事もあつた。宗助は別にそれを氣にも留めなかつた。夫れにも拘らず、二人は漸く接近した。幾何ならずして冗談を云ふ程の親しみが出來た。

其内又秋が來た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰返す興味に乏しかつた宗助は、安井とお米に誘はれて茸狩に行つた時、朗かな空氣のうちに又新しい香を見出した。紅葉も三人で觀た。嵯峨から山を拔けて高雄へ歩く途中で、お米は着物の裾を捲くつて、長襦袢丈を足袋の上迄率いて、細い傘を杖にした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、お米は

「京都は好い所ね」と云つて二人を顧みた。それを一所に眺めた宗助にも、京都は全く好い所の樣に思はれた。

斯う揃つて外へ出た事も珍らしくはなかつた。家の中で顏を合せる事は猶屢あつた。或時宗助が例の如く安井を尋ねたら、安井は留守で、お米ばかり淋しい秋の中に取殘された樣に一人坐つてゐた。宗助は淋しいでせうと云つて、つい座敷に上り込んで、一つ火鉢の兩側に手を翳しながら、思つたより長話をして歸つた。或時宗助がぼかんとして、下宿の机に倚りかかつた儘、珍らしく時間の使ひ方に困つてゐると、ふとお米が遣つて來た。其處迄買物に出たから、序に寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くり寛ろいだ話をして歸つた。

斯んな事が重なつて行くうちに、木の葉が何時の間にか落ちて仕舞つた。さうして高い山の頂が、ある朝眞白に見えた。吹き颯しの河原が白くなつて、橋を渡る人の影が細く動いた。其年の京都の冬は、音を立てずに肌を透す陰忍な質のものであつた。安井は此惡性の寒氣に中てられて、苛いインフルエンザに罹つた。熱が普通の風邪よりも餘程高かつたので、始めはお米も驚いたが、それは一時の事ですぐ退いたには退いたから、是でもう全快と思ふと、何時迄立つても判然しなかつた。安井は竊の樣な熱に絡み付かれて毎日其差引に苦んだ。

醫者は少し呼吸器を冒されてゐる樣だからと云つて、切に轉地を勸めた。安井は心ならず押入の中の柳行李に麻繩を掛けた。お米は手提鞄に錠を卸した。宗助は二人を七條迄見送つて、汽車が出る迄室の中へ這入つて、わざと陽氣な話をした。プラットフォームへ下りた時、窓の内から、

「遊びに來給へ」と安井が云つた。

「何うだ是非」とお米が言つた。

汽車は血色の好い宗助の前をそろ〳〵過ぎて、忽ち神戸の方に向つて煙を吐いた。

病人は轉地先で年を越した。繪葉書は着いた日から毎日の樣に寄こした。それに何時でも遊びに來いと繰返して書いてない事はなかつた。お米の文字も一二行宛は必ず交つてゐた。宗助は安井とお米から屆いた繪端書を別にして机の上に重ねて置いた。外から歸るとそれが直眼に着いた。時々それを一枚宛順に讀み直したり、見直したりした。仕舞にもう悉皆癒つたから歸る。然し折角此處迄來ながら、此處で君の顔を見ないのは遺憾だから、此手紙が着き次第、一寸で可いから來いといふ端書が來た。無事と退屈を忌む宗助を動かすには、この十數言で充分であつた。宗助は汽車を利用して其夜のうちに安井の宿に着いた。

明るい燈火の下に、三人が待設けた顔を合はした時、宗助は何よりも先づ病人の色澤の回復して來た事に氣が付いた。立つ前よりも却て好い位に見えた。安井自身もそんな心持がすると云つて、わざ〳〵襯衣の袖を捲り

上げて、青筋の入つた腕を獨で撫でゝゐた。お米も嬉しさうに眼を輝かした。宗助にはその活潑な目遣が殊に珍らしく受取れた。今迄宗助の心に映じたお米は、色と音の繚亂する裏に立つてさへ、極めて落ち付いてゐた。さうして其落ち付きの大部分は、矢鱈に動かさない眼の働きから來たとしか思はれなかつた。

次の日三人は表へ出て、遠く濃い色を流す海を眺めた。松の幹から脂の出る空氣を吸つた。冬の日は短い空を赤裸々に横切つて大人しく西へ落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈の火の色に染めて行つた。風は夜に入つても起らなかつた。たゞ時々松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊つてゐる三日の間續いた。

宗助はもつと遊んで行たいと云つた。お米はもつと遊んで行ませうと云つた。安井は宗助が遊びに來たから好い天氣になつたんだらうと云つた。三人は又行李と鞄を拵へて京都に歸つた。冬は何事もなく北風を寒い國へ吹き遣つた。山の上を明かにした斑な雪が次第に落ちて、後から青い色が一度に芽を吹いた。

宗助は當時を憶ひ出すたびに、自然の進行が其處ではたりと留まつて、自分もお米も忽ち化石して仕舞つたら、却て苦はなかつたらうと思つた。事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まつて、散り盡した櫻の花が若葉に色を易へる頃に終つた。凡てが生死の戰ひであつた。青竹を炙つて油を絞る程の苦しみであつた。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がつた時は、何處も彼處も既に砂だらけであつたのである。彼等は砂だらけになつた自分達を認めたけれども、何時吹き倒されたかを知らなかつた。

世間は容赦なく彼等に德義上の罪を背負した。然し彼等自身は德義上の良心に責められる前に、一旦茫然として、彼等の頭が確であるかを疑つた。彼等は彼等の眼に、不德義の男女として恥づべく映る前に、既に不合理な男女として、不可思議に映つたのである。其處に言譯らしい言譯が何にもなかつた。だから其處に云ふに忍びない苦痛があつた。彼等は殘酷な運命

が氣紛れに罪もない二人の不意を打つて、面白半分穿の中に突き落したのを無念に思つた。

暇露の日がまともに彼等の眉間を射たとき、彼等は既に德義的に痙攣の苦痛を乘り切つてゐた。彼等は蒼白い額を素直に前に出して、其處に餞に似た烙印を受けた。さうして無形の鎖で繋がれた儘、手を携へて何處迄も一所に歩調を共にしなければならない事を見出した。彼等は親を棄てた。親類を棄てた。友達を棄てた。大きく云へば一般の社會を棄てた。もしくは夫等から棄てられた。學校からは無論棄てられた。たゞ表向丈は此方から退學した事になつて、形式の上に人間らしい迹を留めた。

是が宗助とお米の過去であつた。

十五

此過去を負はされた二人は、廣島へ行つても苦しんだ。福岡へ行つても苦しんだ。東京へ出て來ても、依然として重い荷に抑へつけられてゐた。

佐伯の家とは親しい關係が結べなくなつた。叔父は死んだ。叔母と安之助はまだ生きてゐるが、生きてゐる間に打ち解けた交際は出來ない程、もう冷淡の日を重ねて仕舞つた。今年はまだ歳暮にも行かなかつた。向からも來なかつた。家に引取つた小六さへ、腹の底では兄に敬意を拂つてゐなかつた。二人が東京へ出たてには、單純な子供の頭から、正直にお米を惡んでゐた。お米にも宗助にもそれが能く分つてゐた。夫婦は日の前に笑み、月の前に考へて、靜かな年を送り迎へた。今年ももう盡きる間際迄來た。

通町では暮の内から門並揃の注連飾をした。往來の左右に何十本となく並んだ、軒より高い笹が、悉く寒い風に吹かれて、さら〳〵と鳴つた。宗助も二尺餘りの細い松を買つて、門の柱に釘付にした。それから大きな赤い橙を御供の上に載せて、床の間に据ゑた。床には如何はしい墨畫の梅が、蛤の格好した月を吐いて懸つてゐた。宗助には此變な軸の前に、橙と御供を置く意味が解らなかつた。

「一體是や、何う云ふ了見だね」と自分で飾り付けた物を眺めながら、お

米に聞いた。お米にも毎年斯うする意味は頓と解らなかつた。

「知らないわ。たゞ左様して置けば可いのよ」と云つて臺所へ去つた。宗助は、

「斯うして置いて、詰り食ふためか」と首を傾けて御供の位置を直した。

伸餅は夜業に俎を茶の間迄持ち出して、みんなで切つた。庖丁が足りないので、宗助は始めから仕舞迄手を出さなかつた。力のある丈に小六が一番多く切つた。其代り不同も一番多かつた。中には見掛の惡い形のものも交つた。變なのが出來るたびに清が聲を出して笑つた。小六は庖丁の背に濡布巾を宛がつて、硬い耳の處を斷ち切りながら、

「格好は何うでも、食ひさへすれば可いんだ」と、うんと力を入れて耳迄赤くした。

その外に迎年の支度としては、小殿原を熬つて、煮染を重詰にする位なものであつた。大晦日の夜に入つて、宗助は挨拶旁家賃を持つて、坂井の家に行つた。わざと遠慮して勝手口へ廻ると、摺硝子へ明るい灯が映つて、中はざわ〳〵してゐた。上り框に帳面を持つて腰を掛けた掛取らしい小僧が、立つて宗助に挨拶をした。茶の間には主人も細君もゐた。其片隅に印袢天を着た出入のものらしいのが、下を向いて、小さい輪飾をいくつも拵へてゐた。傍に楪葉と裏白と半紙と鋏が置いてあつた。若い下女が細君の前に坐つて、釣錢らしい札と銀貨を疊に並べてゐた。主人は宗助を見て、

「いや何うも」と云つた。「押し詰まつて嘸御忙しいでせう。此通りでたゞたです。さあ何うぞ此方へ。何ですな、御互に正月にはもう飽きましたな。いくら面白いものでも四十返以上繰返すと厭になりますね」

主人は年の送迎に煩はしい樣な事を云つたが、其態度には何處と指してくさ〳〵した處は認められなかつた。言葉遣は活潑であつた。顏はつやつやしてゐた。晩食に傾けた酒の勢ひが、まだ頰の上に差してゐる如く思はれた。宗助は貰ひ煙草をして二三十分ばかり話して歸つた。

家ではお米が清を連れて湯に行くとか云つて、石鹼入を手拭に包んで、留守居を賴む夫の歸りを待ち受けてゐた。

「何うなすつたの、隨分長かつたわね」と云つて時計を眺めた。時計はもう十時近くであつた。其上清は湯の戻りに髪結の處へ廻つて頭を拵へる筈ださうであつた。閑靜な宗助の活計も、大晦日には夫相應の事件が寄せて來た。

「拂はもう皆濟んだのかい」と宗助は立ちながらお米に問いた。お米はまだ薪屋が一軒殘つてゐると答へた。

「來たら拂つて頂戴」と云つて懷の中から汚れた男持の紙入れと、銀貨入れの蟇口を出して、宗助に渡した。

「小六は何うした」と夫はそれを受取ながら云つた。

「先刻大晦日の夜の景色を見て來るつて出て行つたのよ。隨分御苦勞さまね。此寒いのに」と云ふお米の後に追いて、清は大きな聲を出して笑つた。

やがて、

「お若いから」と評しながら、勝手口へ行つて、お米の下駄を揃へた。

「何處の夜景を見る氣なんだ」

「銀座から日本橋通のだつて」

お米は其時もう框から下掛けてゐた。すぐ腰障子を開ける音がした。宗助は其音を聞き送つて、たつた一人火鉢の前に坐つて、灰になる炭の色を眺めてゐた。彼の頭には明日の日の丸が映つた。外を乘り回す人の、絹帽子の光が見えた。洋劍の音だの、馬の嘶だの、道羽子の聲が聞えた。彼は今から數時間の後、又年中行事のうちで、尤も人の心を新にすべく仕組まれた景物に出逢はなければならなかつた。

陽氣さうに見えるもの、賑かさうに見えるものが、幾組となく彼の心の前を通り過ぎたが、その中で彼の臂を把つて、一所に引張つて行かうとするものは一つもなかつた。彼はたゞ饗宴に招かれない局外者として、酔ふ事を禁じられた如くに、又酔ふ事を免れた人であつた。彼は自分とお米の生命を、毎年平凡な波瀾のうちに送る以上に、面前大した希望も持つてゐなかつた。かうして忙しい大晦日に、一人家を守る靜かさが、丁度彼の平生の現實を代表してゐた。

お米は十時過に歸つて來た。何時もより光澤の好い頰を灯に照して、湯の溫のまだ拔けない襟を少し開ける樣に襦袢を重ねてゐた。長い襟首が能く見えた。

「何うも込んで込んで、洗ふ事も桶を取る事も出來ない位なの」と始めて緩くり息を吐いた。

清の歸つたのは十一時過であつた。是も綺麗な頭を障子から出して、ただ今、どうも遲くなりましたと挨拶をした序に、あれから二人とか三人とか待ち合したと云ふ話をした。

たゞ小六丈は容易に歸らなかつた。十二時を打つたとき、宗助はもう寢やうと云ひ出した。お米は今日に限つて、先へ寐るのも變なものだと思つて、出來る丈話を繋いでゐた。小六は幸ひにして間もなく歸つた。日本橋から銀座へ出て、夫から水天宮の方へ廻つた處が、電車が込んで何臺も待ち合はしたために、遲くなつたといふ言譯をした。

白牡丹へ這入つて景物の金時計でも取らうと思つたが、何も買ふものがなかつたので、仕方なしに鈴の着いたお手玉を一箱買つて、さうして幾百となく器械で吹き上られる風船を一つ攫んだら、金時計は當らないで、こんなものが中つたと云つて、袂から倶樂部洗粉を一袋出した。それをお米の前に置いて、

「姉さんに上げませう」と云つた。それから鈴を着けた、梅の花の形に縫つたお手玉を宗助の前に置いて、

「阪井の御嬢さんにでも御上げなさい」と云つた。

事に乏しい一小家族の大晦日は、それで終りを告げた。

十六

正月は二日目の雪を率ゐて注連飾の都を白くした。降り已んだ屋根の色が故に復る前、夫婦は亞鉛張の庇を滑り落ちる雪の音に幾遍か驚かされた。夜半にはどさと云ふ響が殊に甚だしかつた。小路の泥濘は雨上りと違つて、一日や二日では容易に乾かなかつた。外から靴を汚して歸つて來る宗助が、

お米の顔を見るたびに、

「是りや不可ない」と云ひながら玄關へ上つた。其樣子が恰もお米を路を惡くした責任者と見做してゐる風に受取られるので、お米は仕舞に、

「何うも濟みません。本當に御氣の毒さま」と云つて笑ひ出した。宗助は別に返すべき冗談も有たなかつた。

「お米此處から出掛けるには、何處へ行くにも足駄を穿かなくつちやならない樣に見えるだらう。所が下町へ出ると大違だ。どの通りもどの通りも

から〳〵で、却て埃が立つ位だから、足駄なんぞ穿いちや極りが惡くつて歩けやしない。つまり斯う云ふ所に住んでゐる我々は、一世紀が立た後れる事になるんだね」

こんな事を口にする宗助は、別に不足らしい顔もしてゐなかつた。お米も夫の鼻の穴を潛る烟草の烟を眺める位な氣で、それを聞いてゐた。

「坂井さんへ行つて、さう云つて入らつしやいな」と輕い返事をした。

「さうして家賃でも負けて貰ふ事にしやう」と答へた儘、宗助はついに坂

井へは行かなかつた。

其坂井には元日の朝早く名刺を投げ込んだ丈で、わざと主人の顔を見ずに門を出たが、義理のある所を一日のうちに略片付けて夕方歸つて見ると、留守の間に坂井がちやんと來てゐたので恐縮した。二日は雪が降つた丈で何事もなく過ぎた。三日目の日暮に下女が使に來て、御閑ならば、旦那樣と奥さまと、夫から若旦那樣に是非今晩御遊びに入らつしやる樣にと云つて歸つた。

「何をするんだらう」と宗助が疑ぐつた。

「屹度歌加留多でせう。子供が多いから」とお米が云つた。「貴方行つて入らつしやい」

「折角だから御前行くが好い。己は歌留多は久しく取らないから駄目だ」

「私も久しく取らないから駄目ですわ」

二人は容易に行かうとはしなかつた。仕舞に、では若旦那がみんなを代表して行くが宜からうといふ事になつた。

「若旦那行つて來い」と宗助が小六に云つた。小六は苦笑ひして立つた。夫婦は若旦那と云ふ名を小六に冠らせる事を、大變な滑稽のやうに感じた。若旦那と呼ばれて、苦笑ひする小六の顏を見ると、等しく聲を出して笑ひ出した。小六は春らしい空氣の中から出た。さうして一町程の寒さを横切つて、又春らしい電燈の下に坐つた。

其晩小六は大晦日に買つた梅の花の御手玉を袂に入れて、是は兄から差上げますとわざ〳〵斷つて、坂井のお嬢さんに贈物にした。其代り歸りには、福引に當つた小さな裸人形を同じ袂へ入れて來た。其人形の額が少し缺けて、其處丈墨で塗つてあつた。小六は眞面目な顏をして、是が袖萩ださうですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。何故袖萩だか夫婦には分らなかつた。小六には無論分らなかつたのを、坂井の奥さんが叮嚀に說明して呉れたさうであるが、夫でも腑に落ちなかつたので、主人がわざ〳〵半切に洒落と本文を並べて書いて、歸つたら是れを兄さんと姉さんに、御見せなさいと云つて渡したとかいふ話であつた。小六は袂を探つて其書付を取り出して見せた。それに「此垣一重が黑鐵の」と認めた後に括弧をして、（此餓鬼額が黑缺の）とつけ加へてあつたので、宗助とお米は又春らしい笑を洩らした。

「隨分念の入つた趣向だね。一體誰の考だい」と兄が聞いた。

「誰ですかな」と小六は矢つ張り詰らなさうな顏をして、人形を其處へ放り出した儘、自分の室に歸つた。

それから二三日して、たしか七日の夕方に、また例の坂井の下女が來て、もしお閑なら何うぞお話にと、叮嚀に主人の命を傳へた。宗助とお米は洋燈を點けて丁度晩食を始めた所であつた。宗助は其時茶碗を持ちながら、

「春も漸く一段落が着いた」と語つてゐた。そこへ淸が坂井からの口上を取次いだので、お米は夫の顏を見て微笑した。宗助は茶碗を置いて、

「また何か催しがあるのかい」と少し迷惑さうな眉をした。坂井の下女に聞いて見ると、別に來客もなければ、何の支度もないといふ事であつた。其上細君は子供を連れて、親類へ呼ばれて行つて留守だといふ話迄した。

「それぢや行かう」と云つて宗助は出掛けた。宗助は一般の社交を嫌つてゐた。已を得なければ會合の席などへ顔を出す男でなかつた。個人としての朋友も多くは求めなかつた。訪問はする暇を有たなかつた。たゞ坂井丈は取除であつた。折々は用もないのに此方からわざ〳〵出掛けて行つて、時を潰して來る事さへあつた。其癖坂井は世の中で尤も社交的の人であつた。此社交的な坂井と、孤獨な宗助が二人寄つて話が出來るのは、お米にさへ妙に見える現象であつた。坂井は

「彼方へ行きませう」と云つて、茶の間を通り越して、廊下傳ひに小さな書齋へ入つた。其處には棕櫚の筆で書いた樣な、大きな硬い字が五字ばかり床の間に懸つてゐた。棚の上に見事な白い牡丹が活けてあつた。その外机でも蒲團でも悉く綺麗であつた。坂井は始め暗い入口に立つて、

「さあ何うぞ」と云ひながら、何處かぴちりと捩つて、電氣燈を點けた。

それから、

「一寸待ち給へ」と云つて、燐寸で瓦斯煖爐を焚いた。瓦斯煖爐は室に比例した極小さいものであつた。坂井はしかる後蒲團を薦めた。

「是が僕の洞窟で、面倒になると此處へ避難するんです」

宗助も厚い綿の上で、一種の靜かさを感じた。瓦斯の燃える音が微かにして、次第に脊中からほか〳〵煖まつて來た。

「此處にゐると、もう何處とも交渉はない。全く氣樂です。悠くりして居らつしやい。實際正月と云ふものは豫想外に煩瑣いものですね。私も昨日迄で殆どへと〳〵に降參させられました。新年が停滯てゐるのは實に苦しいですよ。夫で今日の午から、とう〳〵塵世を遠ざけて、病氣になつてぐつと寐込ぢまひました。今しがた眼を覺まして、湯に入つて、それから飯を食つて、煙草を呑んで、氣が付いて見ると、家内が子供を連れて親類へ行つて留守なんでせう。成程靜かな筈だと思ひましてね。すると今度は急に退屈になつたのです。人間も隨分我儘なものですよ。然しいくら退屈だつて、此上お目出たいものを、見たり聞いたりしちや骨が折れますし、又お正月らしいものを、呑んだり食つたりするのも恐れますから、それでお

正月らしくない、と云ふと失禮だが、まあ世の中とあまり緣のない貴方、と云つてもまだ失敬かも知れないが、つまり一口に云ふと、超然派の一人と話しがして見たくなつたんで、それでわざ〳〵使を上げた樣な譯なんです」と坂井は例の調子で、悉くすら〳〵したものであつた。宗助は此樂天家の前では、よく自分の過去を忘れる事があつた。さうして時によると、自分がもし順當に發展して來たら、斯んな人物になりはしなかつたらうかと考へた。

其處へ下女が三尺の狹い入口を開けて這入つて來たが、改めて宗助に鄭重な御辭儀をした上、木皿の樣な菓子皿の樣なものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前に置いて、一口ものを云はずに退がつた。木皿の上には讃談毬ほどな大きな田舍饅頭が一つ載せてあつた。それに普通の倍以上もあらうと思はれる楊枝が添へてあつた。

「何うです暖かい內に」と主人が云つたので、宗助は始めて此饅頭の蒸して間もない新しさに氣が付いた。珍らしさうに黃色い皮を眺めた。

「いや出來たてぢやありません」と主人が又云つた。「實は昨夜ある所へ行つて、冗談半分に賞めたら、御土產に持つて入らつしやいと云ふから貰つて來たんです。其時は全く暖たかだつたんですがね。これは今上げやうと思つて蒸し返さしたのです」

主人は箸とも楊枝とも片の付かないもので、無雜作に饅頭を割つて、むしや〳〵食ひ始めた。宗助も釣に倣らつた。

其間に主人は昨夕行つた料理屋で逢つたとか云つて、妙な藝者の話をした。此藝者はポツケット論語が好きで、汽車へ乘つたり遊びに行つたりするときは、何時でも夫を懷にして出るさうであつた。

「それでね孔子の門人のうちで、子路が一番好だつて云ふんですがね。其所謂を聞くと、子路と云ふ男は、一つ何か敎はつて、それをまだ行はないうちに、又新しい事を聞くと苦にする程正直だからだつて云ふんです。實の所私も子路はあまりよく知らないから困つたが、何しろ一人好い人が出來て、それと夫婦にならない前に、また新しく好い人が出來ると苦になる

樣なものぢやないかつて、聞いて見たんです……」

主人は斯んな事を甚だ氣樂さうに述べ立てた。其話の樣子からして考へると、彼はのべつに斯ういふ場所に出入して、其刺戟にはとうに麻痺しながら、因習の結果、依然として月に何度となく同じ事を繰返してゐるらしかつた。よく聞き糺して見ると、しかく平氣な男も、時々は歡樂の飽滿に疲勞して、書齋のなかで精神を休める必要が起るのださうであつた。

宗助はさういふ方面に丸で經驗のない男ではなかつたので、强ひて興味を裝ふ必要もなく、たゞ尋常な挨拶をする所が、却て主人の氣に入るらしかつた。彼は平凡な宗助の言葉のなかから、一種異彩のある過去を覗く樣な素振を見せた。然しそちらへは宗助が進みたがらない痕迹が少しでも出ると、すぐ話を轉じた。それは政略よりも寧ろ禮讓からであつた。從つて宗助には毫も不愉快を與へなかつた。

其内小六の噂が出た。主人は此青年に就いて、肉身の兄が見逃す樣な新しい觀察を、二三有つてゐた。宗助は主人の評語を、當ると當らないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、彼は年に合はしては複雜な實用に適しない頭を有つてゐながら、年よりも若い單純な性情を平氣で露はす子供ぢやないかといふ質問があつた。宗助はすぐそれを首肯つた。然し學校教育丈で社會教育のないものは、いくら年を取つても其傾きがあるだらうと答へた。

「左樣。それと反對で、社會教育丈あつて學校教育のないものは、隨分複雜な性情を發揮する代に、頭は何時迄も子供ですからね。却て始末が惡いかも知れない」

主人は此處で一寸笑つたが、やがて、

「何うです、私の所へ書生に寄こしちや。少しは社會教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病氣で病院へ這入る一ヶ月前とかに、徵兵檢査に合格して入營したぎり、今では一人もゐないのださうであつた。

宗助は小六の處置を付ける好機會が、求めざるに先だつて、春と共に自

から回つて來たのを喜んだ。同時に、今迄世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇氣を有たなかつた彼は、突然此主人の申出に逢つて少し間誤つく位慌いた。けれども出來るなら成丈早く弟を坂井に預けて置いて、此變動から出る自分の餘裕に、幾分か安之助の補助を足して、さうして本人の希望通り、高等の教育を受けさしてやらうといふ分別をした。そこで打ち明けた話を腹藏なく主人にすると、主人は成程〳〵と聞いてゐる丈であつたが、仕舞に雜作なく、

「そいつは好いでせう」と云つたので、相談は略其座で纏まつた。

宗助は其所で辭して歸れば可かつたのである。又辭して歸らうとしたのである。所が主人からまあ緩くりなさいと云つて留められた。主人は夜は長い、まだ宵だと云つて時計迄出して見せた。實際彼は退屈らしかつた。宗助も歸れば只寢るより外に用のない身體なので、つい又尻を据ゑて、濃い煙草を新しく吹かし始めた。仕舞には主人の例に倣つて、柔かい座蒲團の上で膝さへ崩した。

主人は小六の事に關聯して、

「いや弟抔を有つてゐると、隨分厄介なものですよ。私も一人やくざなのを世話をした覺がありますがね」と云つて、自分の弟が大學にゐるとき金の掛つた事抔を、自分が學生時代の質朴さに比べて色々話した。宗助は此派出好な弟が、其後何んな徑路を取つて、何う發展したかを、氣味の惡い運命の意思を窺ふ一端として、主人に聞いて見た。主人は卒然

「冒險者（アドヴェンチュラー）」と、頭も尾もない一句を投げる樣に吐いた。

此弟は卒業後主人の紹介で、ある銀行に這入つたが、何でも金を儲けなくつちや不可ないと口癖の樣に云つてゐたさうで、日露戰爭後間もなく、主人の留めるのも聞かずに、大いに發展して見たいとか稱へて、遂に滿洲へ渡つたのだと云ふ。其處で何を始めるかと思ふと、遼河を利用して、豆粕大豆を船で下す、大仕掛な運送業を經營して、忽ち失敗してしまつたのださうである。元より當人は、資本主ではなかつたのだけれども、愈といふ曉に、斷定して見ると大きな缺損と事が極つたので、無論事業は繼續す

る譯に行かず、當人は必然の結果、地位を失つたぎりになつた。

「それから後私も何うしたか能く知らなかつたんですが、其後漸く聞いて見ると、驚きましたね。蒙古へ這入つて漂浪いてゐるんです。何處迄山氣があるんだか分らないんで、私も少々劔呑になつてるんですよ。夫でも離れてゐるうちは、まあ何うかしてゐるだらう位に思つて放つて置きます。時たま音信があつたつて、蒙古といふ所は、水に乏しい所で、暑い時には往來へ泥溝の水を撒くとかね、又はその泥溝の水が無くなると、今度は馬の小便を撒くとか、從つて甚だ臭いとか、まあそんな手紙が來る丈ですから、――そりゃあ金の事も云つて來ますが、なに東京と蒙古だから打遣つて置けば夫迄です。だから離れてさへゐれば、まあ可んですが、其奴が去年の暮突然出て來ましてね」

主人は思ひ付いた樣に、床の柱に懸けた、綺麗な房の付いた一種の裝飾物を取り卸した。

それは錦の袋に這入つた一尺ばかりの刀であつた。鞘は何とも知れぬ綠色の雲母の樣なもので出來てゐて、其所々が三ヶ所程銀で卷いてあつた。中身は六寸位しかなかつた。從つて刃も薄かつた。けれども鞘の格好は恰も六角の樫の棒の樣に厚かつた。よく見ると、柄の後に細い棒が二本並んで差さつてゐた。結果は鞘を重ねて離れない爲に、銀の鉢卷をしたと同じであつた。主人は

「土產にこんなものを持つて來ました。蒙古刀ださうです」と云ひながら、すぐ拔いて見せた。後に差してあつた象牙の樣な棒も二本拔いて見せた。

「是や箸ですよ。蒙古人は始終是を腰へぶら下げてゐて、いざ御馳走といふ段になると、此刀を拔いて肉を切つて、さうして此箸で傍から食ふんださうです」

主人はことさらに刀と箸を兩手に持つて、切つたり食つたりする眞似をして見せた。宗助はひたすらに其精巧な作りを眺めた。

「まだ蒙古人の天幕に使ふフエルトも貰ひましたが、まあ昔の毛氈と變つた所もありませんね」

主人は蒙古人の上手に馬を扱ふ事や、蒙古犬の痩せて細長くて、西洋のグレー、ハウンドに似てゐる事や、彼等が支那人のために段々押し狭められて行く事や、――凡て近頃彼地から歸つたといふ弟に聞いた儘を宗助に話した。宗助は又自分の未だ曾て耳にしたことのない話丈に、一々少からぬ興味を有つてそれを聞いて行つた。其うちに、元來此弟は蒙古で何をしてゐるのだらうと云ふ好奇心が出た。乃で一寸主人に尋ねて見ると主人は、

「冒險者」と再び先刻の言葉を力強く繰り返した。「何をしてゐるか分らない。私には、牧畜をやつてゐます、しかも成功してゐますと云ふんですがね、一向當にはなりません。今迄もよく法螺を吹いて私を欺したもんです。それに今度東京へ出て來た用事と云ふのが餘つ程妙です。何とか云ふ蒙古王のために、金を二萬圓許借りたい。もし貸してやらないと自分の信用に關はるつて奔走してゐるんですからね。その取始に捕まつたのは私だが、いくら蒙古王だつて、いくら廣い土地を抵當にするつたつて、蒙古と東京ぢや催促さへ出來やしませんもの。で、私が斷ると、陰へ廻つて妻に、兄さんはあれだから大きな仕事が出來つこないつて、威張つてゐるんです。仕樣がない。」

主人は此處で少し笑つたが、妙に緊張した宗助の顏を見て、

「何うです一遍逢つて御覽になつちや。わざ〳〵毛皮の着いたぶ〳〵したものなんか着て、一寸面白いですよ。何なら御紹介しませう。丁度明後日の晩呼んで飯を食せる事になつてゐるから。――なに引つ掛つちや不可ませんがね。默つて向ふに喋舌らして、聞いてゐる分には、少しも危險はありません。たゞ面白い丈です」としきりに勸め出した。宗助は多少心を動かした。

「御出になるのは御令弟丈ですか」

「いや外に一人弟の友達で向ふから一所に來たものが、來る筈になつてゐます。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男ですが、弟が頻に私に紹介したがるから、實はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」

宗助は其夜蒼い顏をして坂井の門を出た。

十七

宗助とお米の一生を暗く彩どつた關係は、二人の影を薄くして、幽靈の樣な思ひを何處かに抱かしめた。彼等は自己の心の或る部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでゐるのを、仄かに自覺しながら、わざと知らぬ顏に互と向き合つて年を過ごした。

當初彼等の頭腦に痛く應へたのは、彼等の過が安井の前途に及ぼした影響であつた。二人の頭の中で沸き返つた凄い泡の樣なものが漸く靜まつた時、二人は安井も亦半途で學校を退いたといふ消息を耳にした。彼等は固より安井の前途を傷けた原因をなしたに違なかつた。次に安井が鄕里に歸つたといふ噂を聞いた。次に病氣に罹つて家に寢てゐるといふ報知を得た。二人はそれを聞くたびに重い胸を痛めた。最後に安井が滿洲に行つたと云ふ音信が來た。宗助は腹の中で、病氣はもう癒つたのだらうかと思つた。又は滿洲行の方が嘘ではなからうかと考へた。安井は身體から云つても、

性質から云つても、滿洲や臺灣に向く男ではなかつたからである。宗助は出來る丈手を回して、事の眞僞を探つた。さうして、或る關係から、安井がたしかに奉天にゐる事を確め得た。同時に彼の健康で、活潑で、多忙である事も確め得た。其時夫婦は顏を見合せて、ほつといふ息を吐いた。

「まあ可からう」と宗助が云つた。

「病氣よりはね」とお米が云つた。

二人は夫から以後安井の名を口にするのを避けた。考へ出す事さへも敢てしなかつた。彼等は安井を半途で退學させ、鄕里へ歸らせ、病氣に罹らせ、もしくは滿洲へ驅り遣つた罪に對して、如何に悔恨の苦みを重ねても、何うする事も出來ない地位に立つてゐたからである。

「お米、お前信仰の心が起つた事があるかい」と或時宗助がお米に聞いた。

お米は、たゞ、

「あるわ」と答へた丈で、すぐ「貴方は」と聞き返した。

宗助は薄笑ひをしたぎり、何とも答へなかつた。其代り、推してお米の

信仰に就いて、詳しい質問も掛けなかつた。お米には、それが仕合せかも知れなかつた。彼女はその方面に、是といふ程判然した凝り整つた何物も有つてゐなかつたからである。二人は兎角して會堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潛らずに過ぎた。さうして只自然の惠から來る月日と云ふ緩和劑の力丈で、漸く落ち付いた。時々遠くから不意に現れる訴へも、苦しみとか恐れとかいふ殘酷の名を付けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉體と慾得を離れ過ぎる樣になつた。畢竟するに、彼等の信仰は、神を得なかつたため、佛に逢はなかつたため、互を目標として働いた。互に抱き合つて、丸い圓を描き始めた。彼等の生活は淋しいなりに落ち付いて來た。其淋しい落ち付きのうちに、一種の甘い悲哀を味はつた。文藝にも哲學にも縁のない彼等は、此味を舐め盡しながら、自分で自分の狀態を得意がつて自覺する程の智識を有たなかつたから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であつた。——是が七日の晩に坂井へ呼ばれて、安井の消息を聞く迄の夫婦の有樣であつた。

其夜宗助は家に歸つてお米の顏を見るや否や、

「少し具合が惡いから、すぐ寢よう」と云つて、火鉢に倚りながら、歸りを待ち受けてゐたお米を驚かした。

「何うなすつたの」とお米は眼を上げて宗助を眺めた。宗助は其處に突つ立つてゐた。

宗助が外から歸つて來て、こんな風をするのは、殆どお米の記憶にない位珍らしかつた。お米は卒然何とも知れない恐怖の念に襲はれた如くに立ち上がつたが、殆ど機械的に、戸棚から夜具蒲團を取り出して、夫の云ひ付け通り床を延べ始めた。其間宗助は矢つ張り懷手をして傍に立つてゐた。さうして床が敷けるや否や、そこ〳〵に着物を脱ぎ捨てゝ、すぐ其中に潛り込んだ。お米は枕元を離れ得なかつた。

「何うなすつたの」

「何だか、少し心持が惡い。しばらく斯うして凝としてゐたら、能くなるだらう」

宗助の答は半ば夜着の下から出た。其聲が籠つた樣にお米の耳に響いた時、お米は濟まない顏をして、枕元に坐つたなり動かなかつた。

「彼處へ行つて居ても可いよ。用があれば呼ぶから」

お米は漸く茶の間へ歸つた。

宗助は夜具を被つた儘、ひとり硬くなつて眼を眠つてゐた。彼は此暗い中で、坂井から聞いた話を何度となく反覆した。彼は滿洲にゐる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知らうとは、今が今迄豫期してゐなかつた。もう少しの事で、其安井と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣合せか向合せに坐る運命にならうとは、今夜晩飯を濟ます迄、夢にも思ひ掛けなかつた。彼は寢ながら過去二三時間の經過を考へて、其クライマックスが突如として、如何にも不意に起つたのを不思議に感じた。且悲しく感じた。彼は是程偶然な出來事を借りて、後から斷りなしに足絡を掛けなければ、倒す事の出來ない程强いものとは、自分ながら任じてゐなかつたのである。自分の樣な弱い男を放り出すには、もつと穩當な手段で澤山でありさうなものだと信じてゐたのである。

小六から坂井の弟、それから滿洲、蒙古、出京、安井、――斯う談話の迹を辿れば辿る程、偶然の度はあまりに甚だしかつた。過去の痛恨を新にすべく、普通の人が滅多に出逢はない此偶然に出逢ふために、千百人のうちから選り出されなければならない程の人物であつたかと思ふと、宗助は苦しかつた。又腹立しかつた。彼は暗い夜着の中で熱い息を吐いた。

此二三年の月日で漸く癒り掛けた創口が、急に疼き始めた。疼くに伴れて熱つて來た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みさうになつた。宗助は一層のこと、萬事をお米に打ち明けて、共に苦しみを分つて貰はうかと思つた。

「お米、お米」と二聲呼んだ。

お米はすぐ枕元へ來て、上から覗き込むやうに宗助を見た。宗助は夜具の襟から顏を全く出した。次の間の灯がお米の頰を半分照してゐた。

「熱い湯を一杯貰はう」

宗助はとう〳〵言はうとした事を言ひ切る勇氣を失つて、嘘を吐いて胡麻化した。

翌日宗助は例の如く起きて、平日と變る事なく食事を濟ました。さうして給仕をして呉れるお米の顔に、多少安心の色が見えたのを、嬉しい樣な憐な樣な一種の情緒を以て眺めた。

「昨夕は慌いたわ。何うなすつたのかと思つて」

宗助は下を向いて茶碗に注いだ茶を飲んだ丈であつた。何と答へていゝか、適當な言葉を見出さなかつたからである。

其日は朝からから風が吹き荒んで、折々埃と共に行く人の帽を奪つた。熱があると悪いから、一日休んだらと云ふお米の心配を聞捨にして、例の通り電車へ乘つた宗助は、風の音と車の音の中に首を縮めて、たゞ一つ所を見詰めてゐた。降りる時ひゆうといふ音がして、頭の上の針線が鳴つたのに氣が付いて、空を見たら、此猛烈な自然の力の狂ふ間に、何時もより明かな日がのそりと出てゐた。風は洋袴の股を冷たくして過ぎた。宗助には其砂を捲いて向ふの堀の方へ進んで行く影が、斜めに吹かれる雨の脚の樣に判然見えた。

役所では用が手に着かなかつた。筆を持つて頰杖を突いた儘何か考へた。時々は不必要な墨を妄りに磨り卸ろした。煙草は無暗に喫んだ。さうしては思ひ出した樣に窓硝子を通して外を眺めた。外は見るたびに風の世界であつた。宗助はたゞ早く歸りたかつた。

漸く時間が來て家へ歸つたとき、お米は不安らしく宗助の顔を見て、

「何うもなくつて」と聞いた。宗助は已を得ず、何うもないが、たゞ疲れたと答へて、すぐ炬燵の中へ入つたなり、晩飯迄動かなかつた。其内風は日と共に落ちた。畳の反動で四隣は急にひつそり靜まつた。

「好い安排ね、風が無くなつて。畳間の樣に吹かれると、家に坐つてゐても何だか氣味が悪くつて仕樣がないわ」

お米の言葉には、魔物でもあるかの樣に、風を恐れる調子があつた。宗助は落ち付いて、

「今夜は少し暖かい樣だね。穩かで好い御正月だ」と云つた。飯を濟まして煙草を一本吸ふ段になつて、突然、

「お米、寄席へでも行つて見やうか」と珍らしく細君を誘つた。お米は無論否む理由を有たなかつた。小六は義太夫などを聞くより、宅に居て併でも燒いて食つた方が勝手だといふので、留守を賴んで二人出た。

少し時間が遲れたので、寄席は一杯であつた。二人は坐蒲團を敷く餘地もない一番後の方に、立膝をする樣に割り込まして貰つた。

「大變な人ね」

「矢つ張り春だから入るんだらう」

二人は小聲で話しながら、大きな部屋にぎつしり詰つた人の頭を見廻した。其頭のうちで、高座に近い前の方は、烟草の烟で霞んでゐる樣にぼんやり見えた。宗助には此累々たる黑いものが、悉く斯う云ふ娛樂の席へ來て、面白く半夜を潰す事の出來る餘裕のある人らしく思はれた。彼は何の顏を見ても羨ましかつた。

彼は高座の方を正視して、熱心に淨瑠璃を聞かうと力めた。けれどもいくら力めても面白くならなかつた。時々眼を外らして、お米の顏を偸み見た。見るたびにお米の視線は正しい所を向いてゐた。傍に夫のゐる事は殆んど忘れて、眞面目に聽いてゐるらしかつた。宗助は羨ましい人のうちに、お米迄勘定しなければならなかつた。

中入の時、宗助はお米に、

「何うだ、もう歸らうか」と云ひ掛けた。お米は其唐突なのに驚かされた。

「厭なの」と聞いた、宗助は何とも答へなかつた。お米は、

「何うでも可いわ」と半分夫の意に忤らはない樣な挨拶をした。宗助は折角連れて來たお米に對して、却つて氣の毒な心が起つた。とう〳〵仕舞迄辛抱して坐つてゐた。

家へ歸ると、小六は火鉢の前に胡坐を掻いて、背表紙の反返るのも構はずに、手に持つた本を上から翳して讀んでゐた。鐵瓶は傍へ卸したなり、湯は生溫く冷めてしまつた。盆の上に燒餘りの併が、三切か四片載せてあ

つた。網の下から小皿に殘つた醤油の色が見えた。

小六は席を立つて、

「面白かつたですか」と聞いた。夫婦は十分程身體を炬燵で暖めた上、すぐ床へ入つた。

翌日になつても宗助の心に落付が來なかつた事は、略前の日と同じであつた。役所が退けて、例の通り電車へ乘つたが、今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に來ると云ふ事を想像すると、何うしても、わざ〳〵其人と接近するために、こんな速力で、家へ歸つて行くのが不合理に思はれた。同時に安井はその後何んなに變化したらうと思ふと、餘所から一目彼の樣子が眺めたくもあつた。

坂井が一昨日の晩、自分の弟を評して、一口に「冒險者」と云つた。その音が今宗助の耳に高く響き渡つた。宗助は此一語の中に、あらゆる自暴と自棄と、不平と憎惡と、亂倫と悖德と、盲斷と決行とを想像して、是等の一角に觸れなければならない程の坂井の弟と、それと利害を共にすべく滿洲から一所に出て來た安井が、如何なる程度の人物になつたかを、頭の中で描いて見た。描かれた畫は無論、冒險者の字面の許す範圍内で、尤も強い色彩を帶びたものであつた。

斯樣に墮落の方面を特に誇張した冒險者を、頭の中で拵へ上げた宗助は、其の責任を自身一人が全く負はなければならない樣な氣がした。彼はたゞ坂井へ客に來る安井の姿を一目見て、其姿から、安井の今日の人格を髣髴したかつた。さうして、自分の想像程彼は墮落してゐないといふ慰藉を得たかつた。

彼は坂井の家の傍に立つて、向に知れずに、他を窺ふ樣な便利な場所はあるまいかと考へた。不幸にして、身を隱すべきところを思ひ付き得なかつた。若し日が落ちてから來るとすれば、此方が認められない便宜があると同時に、暗い中を通る人の顏の分らない不都合があつた。

そのうち電車が神田へ來た。宗助は何時の通り其處で乘換へて、家の方へ向いて行くのが苦痛になつた。彼の神經は一歩でも安井の來る方角へ近

づくに堪へなかつた。安井を餘所ながら見たいといふ好奇心は、始めから左程強くなかつた丈に、乘換の間際になつて、全く抑へつけられてしまつた。彼は寒い町を多くの人の如く歩いた。けれども多くの人の如くに、判然した目的は有つてゐなかつた。其内店に灯が點いた。電車も燈火を照した。宗助はある牛肉店に上がつて酒を飲み出した。一本は夢中に飲んだ。二本目は無理に飲んだ。三本目にも酔へなかつた。宗助は背を壁に持たして、酔つて相手のない人の樣な眼をして、ぼんやり何處かを見詰めてゐた。

時刻が時刻なので、夕飯を食ひに來る客は入れ代り立ち代り來た。其多くは用辨的に飲食を濟ませて、さつさと勘定をして出て行く丈であつた。宗助は周圍のざわつく中に默然として、他の倍も三倍も時を過ごした如くに感じた末、遂に坐り切れずに席を立つた。

表は左右から射す店の灯で明らかであつた。軒先を通る人は、帽も衣裝もはつきり物色する事が出來た。けれども廣い寒さを照すには餘りに弱過ぎた。夜は戸毎の瓦斯と電燈を閉却して、依然として暗く大きく見えた。

宗助は此世界と調和する程な黑味の勝つた外套に包まれて歩いた。其時彼は自分の呼吸する空氣さへ灰色になつて、肺の中の血管に觸れる樣な氣がした。

彼は此晩に限つて、ベルを鳴して忙しさうに眼の前を往つたり來たりする電車を利用する考へが起らなかつた。目的を有つて途を行く人と共に、拔目なく足を運ばす事を忘れた。しかも彼は根の締らない人間として、かく漂浪の雛形を演じつゝある自分の心を省みて、もし此狀態が長く續いたら何うしたら可からうと、ひそかに自分の未來を案じ煩つた。今日迄の經過から推して、凡ての創口を癒合するものは時日であるといふ格言を、彼は自家の經驗から割り出して、深く胸に刻み付けてゐた。それが一昨日の晩にすつかり崩れたのである。

彼は黑い夜の中を歩きながら、たゞ何かして此心から逃れ出たいと思つた。其心は如何にも弱くて落付かなくつて、不安で不定で、度胸がなさ過て希知に見えた。彼は胸を抑へつける一種の壓迫の下に、如何にせば、今

の自分を救ふ事が出來るかといふ實際の方法のみを考へて、其壓迫の原因になつた自分の罪や過失は全く此結果から切放して仕舞つた。其時の彼は他の事を考へる餘裕を失つて、悉く自己本位になつてゐた。今迄は忍耐で世を渡つて來た。是からは積極的に人生觀を作り易へなければならなかつた。さうして其人生觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の實質が太くなるものでなくては駄目であつた。

彼は行く〳〵口の中で何遍も宗教の二字を繰返した。けれども其響は繰返す後からすぐ消えて行つた。攫んだと思ふ煙が、手を開けると何時の間にか無くなつてゐる樣に、宗教とは果敢ない文字であつた。

宗教と關聯して宗助は、坐禪といふ記憶を呼起した。昔京都に居た時分、彼の級友に相國寺へ行つて坐禪をするものがあつた。當時彼は其迂濶を笑つてゐた。「今の世に：」と思つてゐた。其級友の動作が別に自分と違つた所もない樣なのを見て、彼は益馬鹿〳〵しい氣を起した。

彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑に値する以上の或る動機から、貴重な時間を惜まずに、相國寺へ行つたのではなからうかと考へ出して、自分の輕薄を深く恥ぢた。もし昔から世俗で云ふ通り安心とか立命とかいふ境地に、坐禪の力で達する事が出來るならば、十日や二十日役所を休んでも構はないから遣つて見たいと思つた。けれども彼は斯道にかけては全くの門外漢であつた。從つて此より以上明瞭な考へも浮ばなかつた。

漸く家へ辿り着いた時、彼は例の樣なお米と、例の樣な小六と、それから例の樣な茶の間と座敷と洋燈と簞笥を見て、自分丈が例にない狀態の下に、此四五時間を暮してゐたのだといふ自覺を深くした。火鉢には小さな鍋が掛けてあつて、其蓋の隙間から湯氣が立つてゐた。火鉢の傍には彼の常に坐る所に、何時もの座蒲團を敷いて、其前にちやんと膳立がしてあつた。

宗助は絲底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、此二三年來朝晩使ひ慣れた木の箸を眺めて、

「もう飯は食はないよ」と云つた。お米は多少不本意らしい風もした。

「おや左樣。餘り遲いから、大方何處かで召上がつたらうとは思つたけれど、若し未だゞと不可ないから」と云ひながら、布巾で鍋の耳を摑んで、土瓶敷の上に卸した。それから清を呼んで膳を臺所へ退げさした。

宗助は斯ういふ風に、何ぞ事故が出來て、役所の退出からすぐ外へ回つて遲くなる場合には、何時でも其頭末の大略を、歸宅早々お米に話すのを例にしてゐた。お米もそれを聞かないうちは氣が濟まなかつた。けれども今夜に限つて彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上つた事も、無理に酒を飲んだ事も、丸で話したくなかつた。何も知らないお米は又平常の通り、無邪氣に夫から夫へと聞たがつた。

「何別に是といふ理由もなかつたのだけれども、――つい彼處いらで牛が食ひたくなつた丈の事さ」

「さうして御腹を消化す爲に、わざ〳〵此處迄歩いて入らしつたの」

「まあ、左樣だ」

お米は可笑しさうに笑つた。宗助は寧ろ苦しかつた。しばらくして、

「留守に坂井さんから迎へに來なかつたかい」と聞いた。

「いゝえ。何故」

「一昨日の晩行つたとき、御馳走するとか云つてゐたからさ」

「まだ？」

お米は少し呆れた顏をした。宗助は夫なり話を切り上げて寐た。頭の中をざわ〳〵何か通つた。時々眼を開けて見ると、例の如く洋燈が暗くして床の間の上に載せてあつた、お米はさも心地好さゝうに眠つてゐた。つい此間迄は自分の方が好く寐られて、お米は幾晩も睡眠の不足に惱されたのであつた。宗助は眼を閉ぢながら、明かに次の間の時計の音を聞かなければならない今の自分を、更に心苦しく感じた。其時計は最初は幾つも續けさまに打つた。それが過るとぴんと只一つ鳴つた。其濁つた音が箒星の尾の樣に、ぼうと宗助の耳朶に暫らく響いてゐた。次には二つ鳴つた。甚だ淋しい音であつた。宗助は其間に何とかして、もつと應揚に生きて行く分別をしなければならないと云ふ決心丈をした。三時は朦朧として聞えた樣

な聞えない樣なうちに過ぎた。四時、五時、六時は丸で知らなかつた。たゞ世の中が膨れた。天が波を打つて伸び且縮んだ。地球が糸で釣した毬の如くに、大きな弧線を描いて空間に搖いた。凡てが恐ろしい魔の支配する夢であつた。七時過に彼はは一つとして、此夢から覺めた。お米が何時もの通り微笑して枕元に坐んでゐた。冴えた日は黑い世の中を疾に何處かへ追ひ遣つてゐた。

十八

宗助は一封の紹介狀を懷にして山門を入つた。彼はこれを同僚の知人の某から得た。其同僚は役所の往復に電車の中で、洋服の隱袋から菜根譚を出して讀む男であつた。かう云ふ方面に趣味のない宗助は、固より菜根譚の何物なるかを知らなかつた。ある日一つ車の腰掛に膝を並べて乘つた時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黃色の表紙を宗助の前に出して、こんな妙な本だと答へた。宗助は重ねて何んな事が書いてあるかと尋ねた。其時同僚は、一口に說明の出來る格好な言葉を有つてゐなかつたと見えて、まあ禪學の書物だらうといふ樣な妙な挨拶をした。宗助は同僚から聞いた此返事を能く覺えてゐた。

紹介狀を貰ふ四五日前、彼は此同僚の傍へ行つて、君は禪學を遣るのかと、突然質問を掛けた。同僚は强く緊張した宗助の顏を見て頗る驚いた樣子であつたが、いや遣らない、唯慰み半分にあんな書物を讀む丈だと、すぐ逃げて終つた。宗助は多少失望に弛んだ下唇を垂れて自分の席に歸つた。

其日歸りがけに、彼等は又同じ電車に乘り合した。先刻宗助の樣子を氣の毒に觀察した同僚は、彼の質問の奥に雜談以上の或る意味を認めたものと見えて、前よりはもつと親切に其方面の話をして聞かした。然し自分は未だ嘗て參禪と云ふ事をした經驗がないと自白した。もし詳しい話が聞きたければ、幸ひ自分の知合に、よく鎌倉へ行く男があるから紹介してやらうと云つた。宗助は車の中で其人の名前と番地を手帳に書留めた。さうして次の日、同僚の手紙を持つてわざ〳〵廻り道をして訪問に出掛けた。宗

助の懐にした書状は、其折席上で認めて貰つたものであつた。

役所は病氣になつて十日許休む事にした。お米の手前も矢張り病氣だと稱つた。

「少し腦が惡いから、一週間程役所を休んで遊んで來るよ」と云つた。お米は此頃の夫の樣子の何處かに、異狀があるらしく思はれるので、内心では始終心配してゐた矢先だから、平生養え切らない宗助の果斷を喜んだ。けれども其突然なのにも全く驚いた。

「遊びに行くつて、何處へ入つしやるの」と眼を丸くしない許りに聞いた。

「矢張鎌倉邊が好からうと思つてる」と宗助は落ち付いて答へた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とは、殆んど緣の遠いものであつた。突然二つのものを結び付けるのは滑稽であつた。お米も微笑を禁じ得なかつた。

「まあ御金持ね。私も一所に連れてつて頂戴」と云つた。宗助は愛すべき細君のこの冗談を味ふ餘裕を有たなかつた。眞面目な顏をして、

「そんな贅澤なところへ行くんぢやないよ。禪寺へ留めて貰つて、一週間か十日、たゞ靜かに頭を休めて見る丈の事さ。それも果して好くなるか、ならないか分らないが、空氣の可い所へ行くと、頭には大變違ふと皆云ふから」と辯解した。

「そりや違ひますわ。だから行つて入らつしやいとも。今のは本當の冗談よ」

お米は善良な夫に調戯つたのを、多少濟まない樣に感じた。宗助は其翌日すぐ貰つて置いた紹介狀を懷にして、新橋から汽車に乘つたのである。

其紹介狀の表には釋宜道樣と書いてあつた。

「此間迄侍者をしてゐましたが、此頃では塔頭にある古い庵室に手を入れて、其處に住んでゐるとか聞きました。何うですか、まあ着いたら尋ねて御覽なさい。庵の名はたしか一窓庵でした」と書いて呉れる時、わざ〳〵注意があつたので、宗助は禮を云つて手紙を受取りながら、侍者だの塔頭だのといふ、自分には全く耳新しい言葉の説明を聞いて歸つたのである。

山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮つてゐるために、

路が急に暗くなつた。其陰氣な空氣に觸れた時、宗助は世の中と寺の中との區別を急に覺つた。靜かな境内の入口に立つた彼は、始めて風邪を意識した。

彼はまづ眞直に歩き出した。左右にも行手にも、堂の樣なものや、院の樣なものがちよい〳〵見えた。けれども人の出入は一切なかつた。悉く寂寞として錆び果てゐた。宗助は何處へ行つて、宜道のゐる處を敎へて貰はうかと考へながら、誰も通らない路の眞中に立つて四方を見回した。

山の裾を切り開いて、一二丁奥へ上る樣に建てた寺だと見えて、後の方は樹の色で高く塞がつてゐた。路の左右も山續か丘續の地勢に制せられて、決して平ではない樣であつた。其小高い處々に、下から石段を疊んで、寺らしい門を高く構へたのが二三軒目に着いた。平地に垣を繞らして、點在してゐるのは、幾多もあつた。近寄つて見ると、何れも門瓦の下に、院號やら庵號やらが額にして懸けてあつた。

宗助は箔の剝げた古い額を一二枚讀んで歩いたが、不圖一窓庵から先へ探し出して、もし其處に手紙の名宛の坊さんがゐなかつたら、もつと奥へ行つて尋ねる方が便利だらうと思ひ付いた。それから逆戻りをして塔中を一々調べに懸ると、一窓庵は山門を這入るや否や、すぐ右手の方の高い石段の上にあつた。丘外れなので日當りの好い、からりとした玄關先を控へて、後の山の懷に暖まつてゐる樣な位置に冬を凌ぐ氣色に見えた。宗助は玄關を通り越して、庫裡の方から土間に足を入れた。上り口の障子の立てある處迄來て、頼む〳〵と二三度呼んで見た。然し誰も出て來て呉れるものはなかつた。宗助はしばらく其處に立つた儘、中の樣子を窺つてゐた。何處迄立つてゐても音沙汰がないので、宗助は不思議な思ひをして、又庫裡を出て門の方へ引返した。すると石段の下から、剃立の頭を青く光らした坊さんが上つて來た。年はまだ二十四五としか見えない若い色白の顏であつた。宗助は門の扉の處に待ち合はして、

「宜道さんと仰しやる方は此方に御出でせうか」と聞いた。

「私が宜道です」と若い僧は答へた。宗助は少し驚いたが、又嬉しくもあ

つた。すぐ懐中から例の紹介狀を出して渡すと、宜道は立ちながら封を切つて、其場で讀み下した。やがて手紙を卷き返して封筒へ入れると、

「能うこそ」と云つて、叮嚀に會釋したなり、先に立つて宗助を導いた。

二人は庫裏に下駄を脱いで、障子を開けて内へ這入つた。其處には大きな圍爐裏が切つてあつた。宜道は鼠木綿の上へ羽織つてゐた薄い粗末な法衣を脱いで釘に掛けて、

「お寒う御座いませう」と云つて、圍爐裏の中に深く埋けてあつた炭を灰の下から掘り出した。

此僧は若いに似合はず甚だ落付いた話振をする男であつた。低い聲で何か受答へをした後で、にやりと笑ふ具合などは、丸で女の樣な感じを宗助に與へた。宗助は心のうちに、この青年がどういふ機緣の元に、思ひ切つて頭を剃つたものだらうかと考へて、其樣子のしとやかな所を、何となく憐れに思つた。

「大變御靜な樣ですが、今日はどなたも御留守なんですか」

「いえ、今日に限らず、何日も私一人です。だから用のあるときは、構はず明放しにして出ます。今も一寸下迄行つて用を足して參りました。それがため折角御出の所を失禮致しました」

宜道は此時改めて遠來の人に對して自分の不在を詫びた。此大きな庵を、たつた一人で預かつてゐるさへ、相應に骨が折れるのに、其上に厄介が增したら嘸迷惑だらうと、宗助は少し氣の毒な色を外に動かした。すると宜道は、

「いえ、些とも御遠慮には及びません。道の爲めで御座いますから」と床しい事を云つた。さうして、目下自分の所に、宗助の外に、まだ一人世話になつてゐる居士のある旨を告げた。此居士は山へ來てもう二年になるとかいふ話であつた。宗助はそれから二三日して、始めて此居士を見たが、彼は剽輕な羅漢の樣な顏をしてゐる氣樂さうな男であつた。細い大根を三四本ぶら下げて、今日は御馳走を買つて來たと云つて、それを宜道に煮てもらつて食つた。宜道も宗助も其相伴をした。此居士は顏が坊さんらしい

ので、時々僧堂の衆に交つて、村の御齋抔に出掛ける事があるとか云つて宜道が笑つてゐた。

其外俗人で山へ修業に來てゐる人の話も色々聞いた。中に筆墨を商なふ男がゐた。脊中へ荷を一杯負つて、二十日なり三十日なり、其處等中回つて歩いて、略賣り盡してしまふと山へ歸つて來て坐禪をする。それから少時して食ふものがなくなると、又筆墨を脊に載せて行商に出る。彼は此兩面の生活を、殆んど循環小數の如く繰返して、飽く事を知らないのだと云ふ。

宗助は一見こだわりの無さゝうな是等の人の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、其懸隔の甚だしいのに驚いた。そんな氣樂な身分だから坐禪が出來るのか、或ひは坐禪をした結果さういふ氣樂な心になれるのか迷つた。

「氣樂では不可ません。道樂に出來るものなら、二十年も三十年も雲水をして苦しひものはありません」と宜道は云つた。

彼は坐禪をするときの一般の心得や、老師から公案の出る事や、その公案に一生懸命嚙り付いて、朝も晩も晝も夜も嚙りつゞけに嚙らなくては不可ない事やら、凡て今の宗助には心元なく見える助言を與へた末、

「御室へ御案内しませう」と云つて立ち上がつた。

圓爐裏の切つてある所を出て、本堂を横に抜けて、其外れにある六畳の座敷の障子を縁から開けて、中へ案内された時、宗助は始めて一人遠くに來た心持がした。けれども頭の中は、周圍の冷靜な趣と反照するためか、却て町にゐるときよりも動搖した。

約一時間もしたと思ふ頃、宜道の足音が又本堂の方から響いた。

「老師が相見になるさうで御座いますから、御都合が宜しければ參りませう」と云つて、叮嚀に敷居の上に膝を突いた。

二人は又寺を空にして連立つて出た。山門の通りを略一丁程奥へ來ると、左側に蓮池があつた。寒い時分だから池の中はたゞ薄濁りに淀んでゐる丈で、少しも清淨な趣はなかつたが、向側に見える高い石の崖外れ迄、緑に

欄干のある座敷が突き出して居る所が、文人畫にでもありさうな風致を添へた。

「彼所は老師が住んでゐられる所です」と宜道は比較的新しい其建物を指した。

二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段を上つて、其正面にある大きな伽藍の屋根を仰いだまゝ直左へ切れた。玄關へ差しかゝつた時、宜道は

「一寸失禮します」と云つて、自分丈裏口の方へ回つたが、やがて奥から出て來て、

「さあ何うぞ」と案内をして、老師のゐる所へ伴れて行つた。

老師といふのは五十格好に見えた。赭黑い光澤のある顏をしてゐた。其皮膚も筋肉も悉く緊つて、何處にも怠りのない所が、銅像のもたらす印象を、宗助の胸に彫り付けた。たゞ唇があまり厚過るので、其處に幾分の弛みが見えた。其代り彼の眼には、普通の人間に到底見るべからざる一種の精彩が閃めいた。宗助が始めて其視線に接した時は、暗中に卒然として白刃を見る思があつた。

「まあ何から入つても同じであるが」と老師は宗助に向つて云つた。「父母未生以前本來の面目は何だか、それを一つ考へて見たら善からう」

宗助には父母未生以前といふ意味がよく分らなかつたが、何しろ自分と云ふものは畢竟何物だか、其本體を捕まへて見ろと云ふ意味だらうと判斷した。それより以上口を利くには、餘り禪といふものゝ知識に乏しかつたので、默つて又宜道に伴れられて一窓庵へ歸つて來た。

晩食の時宜道は宗助に、入室の時間の朝夕二回あることゝ、提唱の時間が午前である事などを話した上、

「今夜は未だ見解も出來ないかも知れませんから、明朝か明晩御誘ひ申しませう」と親切に云つて呉れた。夫から最初のうちは、詰めて坐るのは難儀だから、線香を立てゝそれで時間を計つて、少し宛休んだら好からうと云ふ樣な注意もして呉れた。

宗助は線香を持つて、本堂の前を通つて自分の室と極つた六畳に這入つて、ぼんやりして坐つた。彼からは云ふと所謂公案なるものゝ性質が、如何にも自分の現在と縁の遠い樣な氣がしてならなかつた。自分は今腹痛で惱んでゐる。其腹痛と言ふ訴を抱いて來て見ると、豈計らんや、其對症療法として、六づかしい數學の問題を出して、まあ是でも考へたら可からうと云はれたと一般であつた。考へろと云はれゝば、考へないでもないが、それは一應腹痛が治まつてからの事でなくては無理であつた。

同時に彼は勤めを休んで、わざ〳〵此處迄來た男であつた。紹介狀を書いて呉れた人、萬事に氣を付けて呉れる宜道に對しても、餘りに輕卒な振舞は出來なかつた。彼は先づ現在の自分が許す限りの勇氣を提さげて、公案に向はうと決心した。それが何れの處に彼を導いて、どんな結果を彼の心に持ち來すかは、彼自身と雖も全く知らなかつた。彼は悟といふ美名に欺かれて、彼の平生に似合はぬ冒險を試みやうと企てたのである。さうして、もし此冒險に成功すれば、今の不安な不定な弱々しい自分を救ふ事が出來はしまいかと、果敢ない望みを抱いたのである。

彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教へられた通り座蒲團の上に半跏を組んだ。蹇のうちは左迄とは思はなかつた室が、日が落ちてから急に寒くなつた。彼は坐りながら、脊中のぞく〳〵する程溫度の低い空氣に堪へなかつた。

彼は考へた。けれども考へる方向も、考へる問題の實質も、殆んど捕まへ樣のない空漠なものであつた。彼は考へながら、自分は非常に迂濶な眞似をしてゐるのではなからうかと疑つた。火事見舞に行く間際に、細かい地圖を出して、仔細に町名や番地を調べてゐるよりも、ずつと飛離れた見當違の所作を演じてゐる如く感じた。

彼の頭の中を色々なものが流れた。其あるものは明かに眼に見えた。あるものは混沌として雲の如くに動いた。何處から來て何處へ行くとも分らなかつた。たゞ先のものが消える、すぐ後から次のものが現れた。さうして仕切りなしに夫から夫へと續いた。頭の往來を通るものは、無限で無數

で無盡藏で、決して宗助の命令によつて、留まる事も休む事もなかつた。斷ち切らうと思へば思ふ程、滾々として湧いて出た。

宗助は怖くなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺めた。室は微かな灯で薄暗く照されてゐた。灰の中に立てた線香は、まだ半分程しか燃えてゐなかつた。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて氣が付いた。

宗助はまた考へ始めた。すると、すぐ色のあるもの、形のあるものが頭の中を通り出した。ぞろ〳〵と群がる蟻の如くに動いて行く、あとから又ぞろ〳〵と群がる蟻の如くに現れた。凝としてゐるのはたゞ宗助の身體丈であつた。心は切ない程、苦しい程、堪へがたい程動いた。

其内凝としてゐる身體も、膝頭から痛み始めた。眞直に延ばしてゐた脊髓が次第〳〵に前の方に曲つて來た。宗助は兩手で左の足の甲を抱へる樣にして下へ卸した。彼は何をする目的もなく室の中に立ち上つた。障子を明けて表へ出て、門前をぐる〳〵馳回つて歩きたくなつた。夜はしんとしてゐた。寐てゐる人も起きてゐる人も何處にも居りさうには思へなかつた。

宗助は外へ出る勇氣を失つた。凝と生きながら妄想に苦しめられるのは猶恐ろしかつた。

彼は思切つて又新しい線香を立てた。さうして又略前と同じ過程を繰返した。最後に、もし考へるのが目的だとすれば、坐つて考へるのも寐て考へるのも同じだらうと分別した。彼は室の隅に疊んであつた薄汚ない蒲團を敢いて、其中に潜り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考へる暇もないうちに、深い眠りに落ちて仕舞つた。

眼が覺めると枕元の障子が何時の間にか明るくなつて、白い紙にやがて日の逼るべき色が動いた。盡も留守を置かずに濟む山寺は、夜に入つても戸を閉てる音を聞かなかつたのである。宗助は自分が坂井の崖下の暗い部屋に寐てゐたのでないと意識するや否や、すぐ起き上がつた。縁へ出ると軒端に高く大霸玉樹の影が眼に映つた。宗助は又本堂の佛壇の前を抜けて、園爐裏の切つてある昨日の茶の間へ出た。其處には昨日の通り宜道の法衣が折釘に懸けてあつた。さうして本人は勝手の竈の前に蹲踞まつて、火を

焚いてゐた。宗助を見て、

「お早う」と慇懃に禮をした。「先刻御誘ひ申さうと思ひましたが、よく御寐の樣でしたから、失禮して一人參りました」

宗助は此若い僧が、今朝夜明がたに既に參禪を濟まして、夫から歸つて來て、飯を炊いでゐるのだといふ事を知つた。

見ると彼は左の手で頻りに薪を差し易へながら、右の手に黑い表紙の本を持つて、用の合間〳〵に夫を讀んでゐる樣子であつた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは碧巖集といふ六づかしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕の樣に當途もない考へに耽つて、腦を疲らすより、一層其道の書物でも借りて讀む方が、要領を得る捷徑ではなからうかと思ひ付いた。宜道にさう云ふと、宜道は一も二もなく宗助の考へを排斥した。

「書物を讀むのは極惡う御座います。有體に云ふと、讀書程修業の妨げになるものは無い樣です。私共でも斯うして碧巖抔を讀みますが、自分の程度以上の所になると、丸で見當が付きません。それを好い加減に揣摩する癖がつくと、それが坐る時の妨げになつて、自分以上の境界を豫期して見たり、悟りを待ち受けて見たり、充分突込んで行くべき所に頓挫が出來ます。大變毒になりますから、御止しになつた方が可いでせう。もし强て何か御讀みになりたければ、禪關策進といふ樣な、人の勇氣を鼓舞したり激勵したりするものが宜しう御座いませう。それだつて、唯刺戟の方便として讀む丈で、道其物とは無關係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼は此生若い青い頭をした坊さんの前に立つて、恰も一個の低能兒であるかの如き心持を起した。彼の慢心は京都以來既に銷磨し盡してゐた。彼は平凡を分として、今日迄生き て來た。聞達程彼の心に遠いものはなかつた。彼はたゞ有の儘の彼として、宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遙に無力無能な赤子であると、更に自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新しい發見であつた。同時に自尊心を根絶する程の發見であつた。

宜道が竈の火を消して飯をむらしてゐる間に、宗助は臺所から下りて庭

の井戸端へ出て顔を洗つた。鼻の先にはすぐ雑木山が見えた。其裾の少し平な處を拓いて、菜園が拵へてあつた。宗助は濡れた頭を冷たい空氣に曝して、わざと菜園迄下りて行つた。さうして、其處に崖を横に掘つた大きな穴を見出した。宗助は少時其前に立つて、暗い奥の方を眺めてゐた。やがて茶の間へ歸ると、園爐裏には暖かい火が起つて、鐵瓶に湯の沸る音が聞えた。

「手がないものだから、つい遲くなりまして御氣の毒です。すぐ御膳に致しませう。然しこんな處だから上げるものがなくつて困ります。其代り明日あたりは御馳走に風呂でも立てませう」と宜道が云つて呉れた。宗助は難有く園爐裏の向ふに坐つた。

やがて食事を了へて、わが室へ歸つた宗助は、又父母未生以前と云ふ稀有な問題を眼の前に据ゑて、凝つと眺めた。けれども、もと〳〵筋の立たない、從つて發展のしやうのない問題だから、いくら考へても何處からも手を出す事は出來なかつた。さうして、すぐ考へるのが厭になつた。宗助は不圖お米に此處へ着いた消息を、書かなければならない事に氣が付いた。彼は俗用の生じたのを喜ぶ如くに、すぐ鞄の中から卷紙と封じ袋を取り出して、お米に遣る手紙を書き始めた。まづ此處の閑靜な事、海に近い所爲か、東京よりは餘程暖かい事、空氣の清朗な事、紹介された坊さんの親切な事、食事の不味い事、夜具蒲團の綺麗に行かない事、などを書き連ねてゐるうちに、はや三尺餘りの長さになつたので、其處で筆を擱いたが、公案に苦しめられてゐる事や、坐禪をして膝の關節を痛くしてゐる事や、考へるために益神經衰弱が劇しくなりさうな事は、嫂にも出さなかつた。彼は此手紙に切手を貼つて、ポストに入れなければならない口實を求めて、早速山を下つた。さうして父母未生以前と、お米と、安井に脅かされながら、村の中をうろついて歸つた。

午には、宜道から話のあつた居士に會つた。此居士は茶碗を出して、宜道に飯を盛つて貰ふとき、憚り樣とも何とも云はずに、たゞ合掌して禮を述べたり、相圖をしたりした。此位靜かに物事を爲るのが法だとか云つた。

口を利かず、音を立てないのは、考への邪魔になると云ふ精神からださうであつた。それ程眞劍にやるべきものをと、宗助は昨夜からの自分が、何となく恥づかしく思はれた。

食後三人は園爐裏の傍で暫く話した。其時居士は、自分が坐禪をしながら、何時か氣が付かずにうと〳〵と眠つて仕舞つてゐて、はつと正氣に歸る間際に、おや悟つたなと喜ぶ事があるが、さて愈眼を開いて見ると、矢つ張り元の通りの自分なので失望する許だと云つて、宗助を笑はした。斯う云ふ氣樂な考へで、參禪してゐる人もあると思ふと、宗助も多少は寛ろいだ。けれども三人が分れ〳〵に自分の室に入る時、宜道が、

「今夜はお誘ひ申しますから、是から夕方迄しつかり御坐りなさいまし」

と眞面目に勸めたとき、宗助は又一種の責任を感じた。消化れない堅い團子が胃に滯つてゐる樣な不安な胸を抱いて、わが室へ歸つて來た。さうして又線香を焚いて坐り出した。其癖夕方迄は坐り續けられなかつた。どんな解答にしろ一つ拵へて置かなければならないと思ひながらも、仕舞には根氣が盡きて、早く宜道が夕飯の報知に本堂を通り拔けて來て呉れゝば好いと、夫ばかり氣に掛つた。

日は懊惱と困憊の裡に傾いた。障子に映る時の影が次第に遠くへ立ち退くにつれて、寺の空氣が床の下から冷え出した。風は朝から枝を吹かなかつた。椽側に出て、高い庇を仰ぐと、黑い瓦の小口丈が揃つて、長く一列に見える外に、穩かな空が、蒼い光をわが底の方に沈めつゝ、自分と薄くなつて行く所であつた。

十九

「危險う御座います」と云つて宜道は一足先へ暗い石段を下りた。宗助はあとから續いた。町と違つて夜になると足元が惡いので、宜道は提灯を點けて僅一丁許の路を照らした。石段を下り切ると、大きな樹の枝が左右から二人の頭に蔽ひ被さる樣に空を遮つた。闇だけれども蒼い葉の色が二人の着物の織目に染み込む程に宗助を寒がらせた。提灯の灯にも其色が多少

映る感じがあつた。其提灯は一方に大きな樹の幹を想像する所爲か、甚だ小さく見えた。光の地面に屆く尺數も僅であつた。照された部分は明るい灰色の斷片となつて、暗い中にほつかり落ちた。さうして二人の影が動くに伴れて動いた。

蓮池を行き過ぎて、左へ上る所は、夜はじめての宗助に取つて、少し足元が滑かに行かなかつた。土の中に根を食つてゐる石に、一二度下駄の臺を引掛けた。蓮池の手前から横に切れる裏路もあるが、此方は凸凹が多くて、慣れない宗助には近くても不便だらうと云ふので、宜道はわざ〳〵廣い方を案内したのである。

玄關を入ると、暗い土間に下駄が大分並んでゐた。宗助は曲んで、人の履物を踏まない樣にそつと上へのぼつた。室は八疊程の廣さであつた。其壁際に列を作つて、六七人の男が一側に並んでゐた。中に頭を光らして、黑い法衣を着た僧も交つてゐた。他のものは大概袴を穿いてゐた。此六七人の男は上り口と奥へ通ずる三尺の廊下口を殘して、行儀よく鉤の手に並んでゐた。さうして一言も口を利かなかつた。宗助は是等の人の顏を一目見て、まづ其峻刻なのに氣を奪はれた。彼等は皆固く口を結んでゐた。事ありげな眉を强く寄せてゐた。傍にどんな人がゐるか見向きもしなかつた。如何なるものが外から入つて來ても、全く注意しなかつた。彼等は活きた彫刻の樣に己を持して、火の氣のない室に肅然と坐つてゐた。宗助の感覺には、山寺の寒さ以上に、一種嚴かな氣が加はつた。

やがて寂寞の中に、人の足音が聞えた。初は微かに響いたが、次第に强く床を踏んで、宗助の坐つてゐる方へ近付いて來た。仕舞に一人の僧が廊下口からぬつと現れた。さうして宗助の傍を通つて、默つて外の暗がりへ抜けて行つた。すると遠くの奥の方で鈴を振る音がした。

此時宗助と並んで嚴肅に控へてゐた男のうちで、小倉の袴を着けた一人が、矢張無言の儘立ち上つて、室の隅の廊下口の眞正面へ來て着座した。其處には高さ二尺幅一尺程の木の枠の中に、銅鑼の樣な形をした、銅鑼よりも、ずつと重くて厚さうなものが懸つてゐた。色は蒼黑く貧しい灯に照

らされてゐた。袴を着けた男は、臺の上にある撞木を取り上げて、銅鑼に似た鐘の眞中を二つ程打ち鳴らした。さうして、ついと立つて、廊下口を出て、奥の方へ進んで行つた。今度は前と反對に、足音が段々遠くの方へ去るに從つて、微かになつた。さうして一番仕舞にぴたりと何處かで留まつた。宗助は坐ながら、はつとした。彼は此袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつゝあるだらうかを想像したのである。けれども奥はしんとして靜まり返つてゐた。宗助と並んでゐるものも、一人として顔の筋肉を動かすものはなかつた。たゞ宗助は心の中で、奥からの何物かを待ち受けた。すると忽然として鈴を振る響が彼の耳に應へた。同時に長い廊下を踏んで、此方へ近付く足音がした。袴を着けた男は又廊下口から現れて、無言の儘玄關を下りて、霜の裡に消え去つた。入れ代つて又新しい男が立つて、最前の鐘を打つた。さうして、又廊下を踏み鳴らして奥の方へ行つた。宗助は沈默の間に行はれる此順序を見ながら、膝に手を載せて、自分の番の來るのを待つてゐた。

自分より一人置いて前の男が立つて行つた時は、良暫くしてから、わつと云ふ大きな聲が奥の方で聞えた。其聲は距離が遠いので、劇しく宗助の皷膜を打つ程、強くは響かなかつたけれども、たしかに精一杯威を振つたものであつた。さうして只一人の咽喉から出た個人の特色を帶びてゐた。自分のすぐ前の人が立つた時は、愈わが番が回つて來たと云ふ意識に制せられて、一層落付を失つた。

宗助は此間の公案に對して、自分丈の解答は準備してゐた。けれども、それは甚だ覺束ない薄手のものに過ぎなかつた。室中に入る以上は、何か見解を呈しない譯に行かないので、已を得ず納まらない所を、わざと納まつた樣に取繕つた、其場限りの挨拶であつた。彼は此心細い解答で、僥倖にも難關を通過して見たい抔とは、夢にも思ひ設けなかつた。老師を胡麻化す氣は無論なかつた。其時の宗助はもう少し眞面目であつたのである。單に頭から割り出した、恰も畫にかいた餅の樣な代物を持つて、義理にも室中に入らなければならない自分の空虛な事を恥たのである。

宗助は人のする如くに鐘を打つた。しかも打ちながら、自分は人並に此の鐘を撞木で敲くべき權能がないのを知つてゐた。それを人並に鳴らしてゐる猿の如き己れを深く嫌忌した。

彼は弱味のある自分に恐れを抱きつゝ、入口を出て冷たい廊下へ足を踏み出した。廊下は長く續いた。右側にある室は悉く暗かつた。角を二つ折れ曲ると、向ふの外れの障子に灯影が差した。宗助は其敷居際へ來て留まつた。

室中に入るものは老師に向つて三拜するのが禮であつた。拜しかたは普通の挨拶の樣に頭を疊に近く下げると同時に、兩手の掌を上向に開いて、夫を頭の左右に並べたまゝ、少し物を抱へた心持に耳の邊迄上げるのである。宗助は敷居際に跪づいて形の如く拜を行つた。すると座敷の中で、

「一拜で宜しい」と云ふ會釋があつた。宗助はあとを略して中へ入つた。

室の中はたゞ薄暗い灯に照されてゐた。其弱い光は、如何に大字な書物をも披見せしめぬ程度のものであつた。宗助は今日迄の經驗に訴へて、これ位微かな燈火に、夜を營む人間を憶ひ起す事が出來なかつた。其光は無論月よりも強かつた。且月の如く蒼白い色ではなかつた。けれどももう少しで朦朧の境に沈むべき性質のものであつた。

此靜かな判然しない燈火の力で、宗助は自分を去る四五尺の正面に、宜道の所謂老師なるものを認めた。彼の顏は例によつて鑄物の樣に動かなかつた。色は銅であつた。彼は全身に澁に似た柿に似た茶に似た色の法衣を纏つてゐた。足も手も見えなかつた。たゞ頸から上が見えた。其頸から上が、嚴肅と緊張の極度に安んじて、何時迄經つても變る恐を有せざる如くに人を魅した。さうして頭には一本の毛もなかつた。

此面前に氣力なく坐つた宗助の口にした言葉はたゞ一句で盡きた。

「もつと、ぎろりとした所を持つて來なければ駄目だ」と忽ち云はれた。

「其位な事は少し學問をしたものなら誰でも云へる」

宗助は喪家の犬の如く室中を退いた。後に鈴を振る音が烈しく響いた。

二十

障子の外で野中さん、野中さんと呼ぶ聲が二度程聞えた。宗助は半睡の裡にはいと應へた積であつたが、返事を仕切らない先に、早く知覺を失つて、又正體なく寢入つてしまつた。

二度目に眼が覺めた時、彼は驚ろいて飛び起きた。縁側へ出ると、宜道が鼠木綿の着物に襷を掛けて、甲斐〳〵しく其處いらを拭いてゐた。赤く凍んだ手で濡雑巾を絞りながら、例の如く柔和しいにこやかな顔をして、

「御早う」と挨拶した。彼は今朝も亦とくに參禪を濟ました後、斯うして庵に歸つて働いてゐたのである。宗助はわざ〳〵呼起されても起き得なかつた自分の怠慢を省みて、全く極りの悪い思をした。

「今朝もつい寢忘れて失禮しました」

彼はこそ〳〵勝手口から井戸端の方へ出た。さうして冷たい水を汲んで出來る丈早く顔を洗つた。延び掛かつた髭が、頬の邊で手を刺す樣にざら

ざらしたが、今の宗助にはそれを苦にする程の餘裕はなかつた。彼はしきりに宜道と自分とを對照して考へた。

紹介狀を貰ふときに東京で聞いた所によると、此宜道といふ坊さんは、大變性質の可い男で、今では修業も大分出來上がつてゐると云ふ話だつたが、會つて見ると、丸で一丁字もない小廝の樣に丁寧であつた。かうして襷掛で働いてゐる所を見ると、何うしても一個の獨立した庵の主人らしくはなかつた。納所とも小坊主とも云へた。

此矮小な若僧は、まだ出家をしない前、たゞの俗人として此處へ修業に來た時、七日の間結跏したぎり少しも動かなかつたのである。仕舞には足が痛んで腰が立たなくなつて、厠へ上る折などは、やつとの事壁傳ひに身體を運んだのである。其時分の彼は彫刻家であつた。見性した日に嬉しさの餘り、裏の山へ駈け上つて、草木國土悉皆成佛と大きな聲を出して叫んだ。さうして遂に頭を剃つてしまつた。

此庵を預かる樣になつてから、もう二年になるが、まだ本式に床を延べ

て、樂に足を延ばして寐た事はないと云つた。冬でも着物の儘壁に倚れて坐睡する丈だと云つた。侍者をしてゐた頃などは、老師の犢鼻褌迄洗はせられたと云つた。其上少しの暇を偸んで坐りでもすると、後から來て意地の惡い邪魔をされる、毒吐れる、頭の剃り立てには何の因果で坊主になつたかと悔む事が多かつたと云つた。

「漸く此頃になつて少し樂になりました。しかし未だ先が御座います。修業は實際苦しいものです。さう容易に出來るものなら、いくら私共が馬鹿だつて、斯うして十年も二十年も苦しむ譯が御座いません」

宗助はたゞ惘然とした。自己の根氣と精力の足らない事を齒痒く思ふ上に、夫程歳月を掛けなければ成就出來ないものなら、自分は何しに此山の中迄遣つて來たか、それからが第一の矛盾であつた。

「決して損になる氣遣ひは御座いません。十分坐れば、十分の功があり、二十分坐れば二十分の德があるのは無論です。其上最初を一つ綺麗に打ち拔いて置けば、あとは斯う云ふ風に始終此處に御出にならないでも濟みますから」

宗助は義理にも亦自分の室へ歸つて坐らなければならなかつた。

斯んな時に宜道が來て、

「野中さん提唱です」と誘つて呉れると、宗助は心から嬉しい氣がした。彼は禿頭を捕まへる樣な手の着け所のない難題に惱まされて、坐ながら凝と煩悶するのを、如何にも切なく思つた。どんなに精力を消耗する仕事でも可いから、もう少し積極的に身體を働かしたく思つた。

提唱のある場所は、矢張り一窓庵から一町も隔つてゐた。蓮池の前を通り越して、それを左へ曲らずに眞直に突き當ると、屋根瓦を嚴めしく重ねた高い軒が、松の間に仰がれた。宜道は懷に黑い表紙の本を入れてゐた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱と云ふのが、學校でいふ講義の意味である事さへ、此處へ來て始めて知つた。

室は高い天井に比例して廣く且寒かつた。色の變つた疊の色が古い柱と映り合つて、昔を物語る樣に寂果てゝゐた。其所に坐つてゐる人々も皆地

味に見えた。席次不同に思ひ〳〵の座を占めてはゐるが、高聲に語るもの、笑ふものは一人もなかつた。僧は皆紺麻の法衣を着て、正面の曲彔の左右に列を作つて向ひ合せに並んだ。其曲彔は朱で塗つてあつた。

やがて老師が現れた。盤を見詰めてゐた宗助には、彼が何處を通つて、何處から此處へ出たか薩張分らなかつた。たゞ彼の落ち付き拂つて曲彔に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら、紫の袱紗を解いて、中から取り出した書物を、恭しく卓上に置く所を見た。又其禮拜して退ぞく態を見た。

此時堂上の僧は一聲に合掌して、夢窓國師の遺誡を誦し始めた。思ひ思ひに席を取つた宗助の前後にゐる居士も皆同音に調子を合せた。聞いてゐると、經文の樣な、普通の言葉の樣な、一種の節を帶びた文字であつた。

「我に三等の弟子あり。所謂猛烈にして諸緣を放下し、專一に己事を究明する之を上等と名づく。修業純ならず駁雜學を好む、之を中等と云ふ」云云といふ、餘り長くはないものであつた。宗助は始め夢窓國師の何人なるかを知らなかつた。宜道から此夢窓國師と大燈國師とは、禪門中興の祖であると云ふ事を敎はつたのである。平生跛で充分に足を組む事が出來ないのを憤つて、死ぬ間際に、今日こそ己の意の如くにして見せると云ひながら、惡い方の足を無理に折つぺしよつて結跏したため、血が流れて法衣を裘染ましたといふ大燈國師の話も其折宜道から聞いた。

やがて提唱が始まつた。宜道は懷から例の書物を出して、頁を半ば擦して宗助の前へ置いた。それは宗門無盡燈論と云ふ書物であつた。始めて聞きに出た時、宜道は、

「難有い結構な本です」と宗助に敎へて呉れた。白隱和尙の弟子の東嶺和尙とかいふ人の編輯したもので、重に禪を修行するものが、淺い所から深い所へ進んで行く徑路やら、それに伴ふ心境の變化やらを秩序立てゝ書いたものらしかつた。

中途から顏を出した宗助には、能くも解せなかつたけれども、講者は能辯の方で、默つて聞いてゐるうちに、大變面白い所があつた。其上參禪の

士を鼓舞する爲めか、古來から斯道に苦しんだ人の閲歴譚抔を取り交ぜて、一段の精彩を着けるのが例であつた。此日も其通りであつたが、或所へ來ると、突然語調を改めて、

「此頃室内に來つて、何うも妄想が起つて不可ない抔と訴へるものがあるが」と急に入室者の不熱心を戒め出したので、宗助は覺えずぎくりとした。室中に入つて、其訴へをなしたものは實に彼自身であつた。

一時間の後宜道と宗助は袖をつらねて又一窓庵に歸つた。其歸り路に宜道は、

「あゝして提唱のある時に、よく參禪者の不心得を諷せられます」と云つた。宗助は何も答へなかつた。

二十一

其内山の中の日は一日〳〵と經つた。お米からは可なり長い手紙がもう二本來た。尤も二本共に新に宗助の心を亂す樣な心配事は書いてなかつた。

宗助は常の細君思ひに似ず遂に返事を出すのを怠つた。彼は山を出る前に、何とか此間の問題に片を付けなければ、折角來た甲斐がない樣な、又宜道に對して濟まない樣な氣がしてゐた。眼が覺めてゐる時は、之がために名狀し難い一種の壓迫を受けつゞけに受けた。從つて日が暮れて夜が明けて、寺で見る太陽の數が重なるにつけて、恰も後から追ひ掛けられでもする如く氣を焦つた。けれども彼は最初の解決より外に、一歩も此問題にちかづく術を知らなかつた。彼は又いくら考へても此最初の解決は確なものであると信じてゐた。たゞ理屈から割り出したのだから、腹の足しには一向ならなかつた。彼は此確なものを放り出して、更に又確なものを求めやうとした。けれども左樣ものは少しも出て來なかつた。

彼は自分の室で獨り考へた。疲れると、臺所から下りて、裏の菜園へ出た。さうして崖の下に掘つた横穴の中へ這入つて、凝と動かずにゐた。宜道は氣が散る樣では駄目だと云つた。段々集注して凝固まつて、仕舞に鐵の棒の樣にならなくては駄目だと云つた。さう云事を聞けば聞く程、實際

にさうなるのが困難になつた。

「既に頭の中に、さう仕様と云ふ下心があるから不可ないのです」と宜道が又云つて聞かした。宗助は愈窮した。忽然安井の事を考へ出した。安井がもし坂井の家へ頻繁に出入でもする様になつて、當分滿洲へ歸らないとすれば、今のうちあの借家を引き上げて、何處かへ轉宅するのが上分別だらう。こんな所に恐圖〳〵してゐるより、早く東京へ歸つて其方の處置を付けた方が、まだ實際的かも知れない。緩くり構へて、お米にでも知れると又心配が殖える丈だと思つた。

「私の様なものには到底悟は開かれさうに有りません」と思ひ詰めた様に宜道を捕まへて云つた。それは歸る二三日前の事であつた。

「いえ信念さへあれば誰れでも悟れます」と宜道は躊躇もなく答へた。「法華の凝り固まりが夢中に大鼓を叩く様に遣つて御覽なさい。頭の頓邊から足の爪先迄が悉く公案で充實したとき、俄然として新天地が現前するので御座います」

宗助は自分の境遇やら性質が、夫程盲目的に猛烈な働きを敢てするに適しない事を深く悲しんだ。況や自分の此山で暮らすべき日は既に限られてゐた。彼は直截に生活の葛藤を切り拂ふ積で、却て迂濶に山の中へ迷ひ込んだ恐物であつた。

彼は腹の中で斯う考へながら、宜道の面前で、それ丈の事を言ひ切る力がなかつた。彼は心から此若い禪僧の勇氣と、熱心と、眞面目と、親切とに敬意を表してゐたのである。

「道は近きにあり、却て之を遠きに求むといふ言葉があるが實際です。つい鼻の先にあるのですけれども、何うしても氣が付きません」と宜道はさも殘念さうであつた。宗助は又自分の室に退いて線香を立てた。

斯う云ふ狀態は、不幸にして宗助の山を去らなければならない日迄、目に立つ程の新生面を開く機會なく續いた。愈出立の朝になつて宗助は潔よく未練を拋げ棄てた。

「永々御世話になりました。殘念ですが、何うも仕方がありません。もう

當分御眼に掛かる折も御座いますまいから、隨分御機嫌よう」と宜道に挨拶をした。宜道は氣の毒さうであつた。

「御世話どころか、萬事不行屆で嘸御窮屈で御座いましたらう。然し是程御坐りになつても大分違ひます。わざ〳〵お出になつた丈の事は充分御座います」と云つた。然し宗助には丸で時間を潰しに來た樣な自覺が明らかにあつた。それを斯う取り繕ろつて云つて貰ふのも、自分の腑甲斐なさからであると、獨り恥入つた。

「悟りの遲速は全く人の性質で、それ丈では優劣にはなりません。入り易くても後で塞へて動かない人もありますし、又初め長く掛かつても、愈と云ふ場合に非常に痛快に出來るのもあります。決して失望なさる事は御座いません。たゞ熱心が大切です。亡くなられた洪川和尚などは、もと儒教をやられて、中年からの修業で御座いましたが、僧になつてから三年の間と云ふもの丸で一則も通らなかつたです。夫で私は業が深くて悟れないのだと云つて、毎朝厠に向つて禮拜された位でありましたが、後にはあのやうな知識になられました。これ抔は尤も好い例です」

宜道は斯んな話をして、暗に宗助が東京へ歸つてからも、全く此方を斷念しない樣に、あらかじめ間接の注意を與へる樣に見えた。宗助は謹んで宜道のいふ事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもう既に半分去つた如くに感じた。自分は門を開けて貰ひに來た。けれども門番は扉の向側にゐて、敲いても遂に顏さへ出して呉れなかつた。たゞ、

「敲いても駄目だ。獨で開けて入れ」と云ふ聲が聞えた丈であつた。彼は何うしたら此門の閂を開ける事が出來るかと考へた。さうして其手段と方法を明かに頭の中で拵へた。けれども夫を實地に開ける力は、少しも養成する事が出來なかつた。從つて自分の立つてゐる場所は、此問題を考へない昔と毫も異なる所がなかつた。彼は依然として無能無力に鎖ざゝれた扉の前に取り殘された。彼は平生自分の分別を便りに生きて來た。其分別が今は彼に祟つたのを口惜く思つた。さうして始めから取捨も商量も容れない恐なものゝ一徹一圖を羨んだ。もしくは信念に篤い善男善女の、知慧も

忘れ、思議も浮かばぬ精進の程度を嵩高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立むべき運命をもつて生れて來たものらしかつた。夫れは是非もなかつた。けれども、何うせ通れない門なら、わざ〳〵其處迄辿り付くのが矛盾であつた。彼は後を顧みた。さうして到底又元の路へ引返す勇氣を有たなかつた。彼は前を眺めた。前には堅固な扉が何時迄も展望を遮ぎつてゐた。彼は門を通る人ではなかつた。又門を通らないで濟む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

宗助は立つ前に、宜道と連れだつて、老師の許へ一寸暇乞に行つた。老師は二人を蓮池の上の、緣に勾欄の着いた座敷に通した。宜道は自ら次の間に立つて、茶を入れて出た。

「東京はまだ寒いでせう」と老師が云つた。「少しでも手掛が出來てからだと、歸つたあとも樂だけれども。惜い事で」

宗助は老師の此挨拶に對して、丁寧に禮を述べて、又十日前に潜つた山門を出た。甕を壓する杉の色が、冬を封じて黑く彼の後に聳えた。

二十二

家の敷居を跨いだ宗助は、己れにさへ惘然な姿を描いた。彼は過去十日間、毎朝頭を冷水で濡らしたなり、未だ曾て櫛の齒を通した事がなかつた。髭は固より剃る暇を有たなかつた。三度とも宜道の好意で白米の炊いだのを食べたには食べたが、副食物と云つては、菜の煮たのか大根の煮たの位なものであつた。彼の顏は自から蒼かつた。出る前よりも多少面窶れてゐた。其上彼は一窓庵で考へ續けに考へた習慣が、まだ全く拔け切らなかつた。何處かに卵を抱く牝鷄の樣な心持が殘つて、頭が平生の通り自由に働かなかつた。其癖一方では坂井の事が氣に掛つた。坂井と云ふよりも、坂井の所謂冒險者として宗助の耳に響いた其弟と、其弟の友達として彼の胸を騷がした安井の消息が氣にかゝつた。けれども彼は自身に家主の宅へ出向いて、それを聞き糺す勇氣を有たなかつた。間接に其をお米に問ふこ

とは猶出來なかつた。彼は山にゐる間さへ、お米が此事件に就いて何事も耳にして呉れなければ可いがと、氣遣はない日はなかつた位である。宗助は年來住み慣れた家の座敷に坐つて、

「汽車に乘ると短い道中でも氣の所爲か疲れるね。留守中に別段變つた事はなかつたかい」と聞いた。實際彼は短い汽車旅行にさへ堪へかねる顏付をしてゐた。

お米は如何な場合にも、夫の前に忘れなかつた笑顏さへ作り得なかつた。と云つて、折角保養に行つた轉地先から今歸つて來たばかりの夫に、行かない前より却て健康が惡くなつたらしいとは、氣の毒で露骨に話し惡かつた。わざと活潑に、

「いくら保養でも、家へ歸ると、少しは氣疲が出るものよ。けれども貴方は餘まり爺々汚いわ。後生だから一休みしたら御湯に行つて、頭を刈つて髭を剃つて來て頂戴」と云ひながら、わざ〳〵机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助はお米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空氣を風で拂つたやうな心持がした。一たび山を出て家へ歸れば矢張り元の宗助であつた。

「坂井さんからは其後何とも云つて來ないかい」

「いゝえ何とも」

「小六の事も」

「いゝえ」

其小六は圖書館へ行つて留守であつた。宗助は手拭と石鹼を持つて外へ出た。

明る日役所へ出ると、みんなから病氣はどうだと聞かれた。中には少し瘠せた樣ですねと云ふものもあつた。宗助には夫が無意識の冷評の意味に聞えた。菜根譚を讀む男はたゞ、何うです旨く行きましたかと尋ねた。宗助は此問にも大分痛い思ひをした。

其晩は又お米と小六から、代る〴〵鎌倉の事を根掘り葉掘り問はれた。

「氣樂でせうね。留守居も何も置かないで出られたら」とお米が云つた。

「それで一日幾何出すと置いて呉れるんです」と小六が聞いた。「鐵砲でも擔いで行つて、獵でもしたら面白からう」とも云つた。

「然し退屈ね。そんなに淋しくつちや。朝から晩迄寐て入らつしやる譯にも行かないでせう」とお米が又云つた。

「もう少し滋養物が食へる處でなくつちや、矢つ張り身體に可くないでせう」と小六が又云つた。

宗助は其夜床の中へ入つて、明日こそ思ひ切つて坂井へ行つて、安井の消息をそれとなく聞き糺して、もし彼がまだ東京にゐて、猶しば〳〵坂井と往復がある樣なら、遠くの方へ引越して仕舞はうと考へた。

次の日は平凡に宗助の頭を照して、事なき光を西に落した。夜に入つて彼は、

「一寸坂井さん迄行つて來る」と云ひ捨てゝ門を出た。月のない坂を上つて、瓦斯燈に照らされた砂利を鳴らしながら潛戸を開けた時、彼は今夜此處で安井に落ち合ふ樣な萬一は、まづ起らないだらうと度胸を据ゑた。其でもわざと勝手口へ廻つて、お客來ですかと聞くことは忘れなかつた。

「能く御出です。何うも相變らず寒いぢやありませんか」と云ふ常の通り元氣の好い主人を見ると、子供を大勢自分の前へ並べて、其中の一人と掛聲をかけながら、じやん拳を遣つてゐた。相手の女の子の年は、六つ計に見えた。赤い幅のあるリボンを蝶々の樣に頭の上に喰つ付けて、主人に負ない程の勢ひで、小さな手を握り固めてさつと前へ出した。其斷然たる樣子と、其握り拳の小さゝと、之に反して主人の仰山らしく大きな拳骨が、對照になつて皆の笑を惹いた。火鉢の傍に見てゐた細君は、

「そら今度こさ雪子の勝だ」と云つて愉快さうに綺麗な齒を露はした。子供の膝の傍には、白だの赤だの藍だのゝ硝子玉が澤山あつた。主人は、

「とう〳〵雪子に負けた」と席を外して、宗助の方を向いたが、「何うです又洞窟へでも引き込みますかな」と云つて立ち上がつた。

書齋の柱には、例の如く錦の袋に入れた蒙古刀が振下がつてゐた。花活には何處で咲いたか、もう黃色い菜の花が插してあつた。宗助は床柱の中

途を華やかに彩どる袋に眼を着けて、

「相變らず掛かつて居りますな」と云つた。さうして主人の氣色を頭の奥から窺つた。主人は、

「えゝ些と物數奇過ぎますね、蒙古刀は」と答へた。「所が弟の野郎そんな玩具を持つて來ては、兄貴を籠絡する積だから困りものぢやありませんか」

「御舍弟は其後何うなさいました」と宗助は何氣ない風を示した。

「えゝ漸く四五日前歸りました。ありや全く蒙古向ですね。お前の樣な夷狄は東京にや調和しないから早く歸れつたら、私もさう思ふつて歸つて行きました。何うしても、ありや萬里の長城の向側にゐるべき人物ですよ。さうしてゴビの沙漠の中で金剛石でも拔してゐれば可いんです」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか。あれも無論一所です。あゝなると落付いちや居られないと見えますね。何でも元は京都大學にゐたこともあるんだとか云ふ話ですが。何うして、あゝ變化したものですかね」

宗助は腋の下から汗が出た。安井が何う變つて、どう落付かないのか、全く聞く氣にはならなかつた。たゞ自分が主人に安井と同じ大學にゐた事を、まだ洩らさなかつたのを天佑の樣に有難く思つた。けれども主人は其弟と安井とを晩餐に呼ぶとき、自分を此二人に紹介しやうと申出た男である。辭退をして其席へ顏を出す不面目丈は漸と免れた樣なものゝ、其晩主人が何かの機會に、つい自分の名を二人に洩さないとは限らなかつた。宗助は後暗い人の、變名を用ひて世を渡る便利を切に感じた。彼は主人に向つて、「貴方はもしや私の名を安井の前で口にしやしませんか」と聞いて見たくて堪らなかつた。けれども、夫れ丈けは何うしても聞けなかつた。

下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛つて出た。一丁の豆腐位な大きさの金玉糖の中に、金魚が二疋透いて見えるのを、其儘庖丁の刃を入れて、元の形を崩さずに、皿に移したものであつた。宗助は一目見て、たゞ珍らしいと感じた。けれども彼の頭は寧ろ他の方面に氣を奪はれてゐた。すると主人が、「何うです一つ」と例の通り先づ自分から手を出した。

「是はね、昨日ある人の銀婚式に呼ばれて、貰つて來たのだから、頗ぶる御目出度のです。貴方も一切位肖つても可いでせう」

主人は肖りたい名の下に、甘垂るい金玉糖を幾切か頬張つた。これは酒も飲み、茶も飲み、飯も菓子も食へる樣に出來た、重寶で健康な男であつた。

「何實を云ふと、二十年も三十年も夫婦が皺だらけになつて生きてゐたつて、別に御目出度もありませんが、其處が物は比較的な所でね。私は何時か清水谷の公園の前を通つて驚いた事がある」と變な方面へ話を持つて行つた。斯ういふ風に、夫から夫へと客を飽かせない樣に引張つて行くのが、社交になれた主人の平生の調子であつた。

彼の云ふ所によると、清水谷から辨慶橋へ通じる泥溝の樣な細い流れの中に、春先になると無數の蛙が生れるのださうである。其蛙が押し合ひ鳴き合つて生長するうちに、幾百組か幾千組の戀が泥渠の中で成立する。而して夫等の愛に生きるものが、ならない許に躊躇なく清水谷から辨慶橋へ續いて、互に睦まじく浮いてゐると、通り掛りの小僧だの閑人が、石を打ち付けて、無殘にも蛙の夫婦を殺して行くものだから、其數が殆んど勘定し切れない程多くなるのださうである。

「死屍累々とはあの事ですね。それが皆夫婦なんだから實際氣の毒ですよ。詰りあすこを二三町通るうちに、我々は悲劇にいくつ出逢ふか分らないんです。夫を考へるとお互は實に幸福でさあ。夫婦になつてるのが惡らしいつて、石で頭を破られる恐れは、まあ無いですからね。しかも雙方ともに二十年も三十年も安全なら、全く御目出たいに違ありませんよ。だから一切位肖つて置く必要もあるでせう」と云つて、主人はわざと箸で金玉糖を挾んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。

こんな冗談交りの話を、主人はいくらでも續けるので、宗助は已むを得ず或る邊までは釣られて行つた。けれども腹の中は決して主人の樣に太平樂には行かなかつた。辭して表へ出て、又月のない空を眺めた時は、其深く黑い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物凄さを感じた。

彼は坂井の家に、たゞ苟くも免れんとする料簡で行つた。さうして、其目的を達するために、恥と不愉快を忍んで、好意と眞率の氣に充ちた主人に對して、政略的に談話を驅つた。しかも知らうと思ふ事は悉く知る事が出來なかつた。己れの弱點に付いては、一言も彼の前に自白するの勇氣も必要も認めなかつた。

彼の頭を掠めんとした雨雲は、辛うじて頭に觸れずに過ぎたらしかつた。けれども、是に似た不安は是から先何度でも、色々な程度に於て、繰返さなければ濟まない樣な、蟲の知らせが何處かにあつた。夫を繰返させるのは天の事であつた。夫を逃げて廻るのは宗助の事であつた。

二十三

月が變つてから寒さが大分緩んだ。官吏の增俸問題につれて必然起るべく、多數の噂に上つた局員課員の淘汰も、月末迄に略片付いた。其間ぽつ〳〵と首を斬られる知人や未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ歸つてお米に、

「今度は己の番かも知れない」と云ふ事があつた。お米はそれを冗談とも聞き、又本氣とも聞いた。稀には隱れた未來を故意に呼出す不吉な言葉とも解釋した。それを口にする宗助の胸の中にも、お米と同じ樣な雲が去來した。

月が改まつて、役所の動搖も是で一段落だと沙汰せられた時、宗助は生き殘つた自分の運命を顧みて、當然の樣にも思つた。又偶然の樣にも思つた。立ちながら、お米を見下して、

「まあ助かつた」と六づかし氣に云つた。其嬉しくも悲しくもない樣子が、お米には天から落ちた滑稽に見えた。

又二三日して宗助の月給が五圓昇つた。

「原則通二割五分增さないでも仕方があるまい。休められた人も、元給の儘でゐる人も澤山あるんだから」と云つた宗助は、此五圓に自己以上の價値をもたらし歸つた如く滿足の色を見せた。お米は無論の事心のうちに、

不足を訴へるべき餘地を見出さなかつた。

翌日の晩宗助はわが膳の上に頭つきの魚の、尾を皿の外に躍らす態を眺めた。小豆の色に染まつた飯の香を嗅いだ。」お米はわざ〳〵清を遣つて、坂井の家に引き移つた小六を招いた。小六は、

「やあ御馳走だなあ」と云つて勝手から入つて來た。

梅がちらほらと眼に入る樣になつた。早いのは既に色を失つて散りかけた。雨は烟る樣に降り始めた。それが霽れて、日に蒸されるとき、地面からも、屋根からも、春の記憶を新にすべき濕氣がむら〳〵と立ち上つた。

沓戸に干した雨傘に、小犬がじやれ掛つて、蛇の目の色がきら〳〵する所に、陽炎が燃える如く長閑に思はれる日もあつた。

「漸く冬が過ぎた樣ね。貴方今度の土曜に佐伯の叔母さんの處へ廻つて、小六さんの事を極めて入らつしやいよ。あんまり何時迄も放つて置くと、又安さんが忘れて仕舞ふから」

「うん、思ひ切つて行つて來よう」と答へた。小六は坂井の好意で、其處の書生に住み込んだ。其上に宗助と安之助が、不足の處を分擔する事が出來たらと小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は兄の運動を待たずに、すぐ安之助に直談判をした。さうして、形式的に宗助の方から依頼すれば、すぐ安之助が引受ける迄に自分で埒を明けたのである。

小康は斯くして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜の午宗助は久し振りに、四日目の垢を流すため横町の洗湯に行つたら、五十許りの頭を剃つた男と、三十代の商人らしい男が、漸く春らしくなつたと云つて、時候の挨拶を取り換はしてゐた。若い方が、今朝始めて鶯の鳴聲を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は二三日前にも一度聞いた事があると答へてゐた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「えゝ、まだ充分に舌が廻りません」

宗助は家へ歸つてお米に此鶯の問答を繰返して聞かせた。お米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見て、

「本當に難有いわね。漸くの事春になつて」と云つて、晴れ〻しい眉を張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、然し又ぢき冬になるよ」と答へて、下を向いたまゝ、鋏を動かしてゐた。

明治四十三年十二月二十九日印刷
明治四十四年一月一日發行
門
（實價金壹圓參拾錢）

著作者　東京市日本橋區通四丁目五番地　夏目金之助

發行者　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地　和田靜子

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　中野鉄太郎

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
電話本局五一番
振替口座東京一六一七

夏目漱石氏著
橋口五葉氏意匠

小說 鶉籠	第十版	菊判五百餘頁	實價金壹圓參拾錢 小包料金拾貳錢
小說 三四郎	第五版	菊判四百餘頁	實價金壹圓參拾錢 小包料金拾貳錢
小說 草合	第二版	菊判五百八十餘頁	實價金壹圓七拾錢 小包料金拾貳錢
文學評論	第三版	菊判六百二十餘頁	實價金壹圓八拾錢 小包料金拾貳錢
小說 虞美人草	第六版	菊判六百頁	實價金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢
小說 それから	第二版	菊判四百頁	實價金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢
漱石近什 四篇（文鳥・永日十夜・夢十夜・坑夫）	第二版	菊判二百九十頁	實價金壹圓貳拾錢 小包料金拾貳錢

東京 春陽堂 發行

329
84

095568-000-4

329-84

門

夏目　漱石／著

M44

DBQ-3268

14.8.33